

新たな江戸時代の魅力を発見する一大叢書

民衆・女性・子ども・老人・身分・日常生活・風習・習慣・教育・道德・教訓・神話・伝説・社会・制度・産業・労働・
農耕・職人・風俗・芸能・医学・科学・経済・商業・交通・地理・地誌・地域・地震・洪水・気象・災害・宗教・絵画・
美術・書道・出版・歴史・しぐさ・語り・歌・踊り・娯楽

*豊富なヴィジュアル資料

江戸時代庶民文庫

〈第2期(61〜100巻+別巻)〉

2022年5月〈完結〉

江戸時代の庶民生活の諸相を
貴重な版本(影印)で見せる
一大叢書

『江戸時代庶民文庫』全100巻

●収録資料 354点

●総(影印)ページ約 39,000頁

〈価格・配本経過〉…p.2

別巻…p.22-25

学術資料出版

大空社出版

www.ozorasha.co.jp

東京都東村山市秋津町 5-24-13-101 (〒189-0001)
TEL:042-306-3383 / FAX:042-306-3384
eigyo@ozorasha.co.jp

2026年10月

江戸時代庶民文庫

全100巻 別巻2

解題 小泉吉永
〈往来物研究家〉

2026 年 10 月 1 日



●収録資料 354点 ●総(影印)ページ約 39,000頁
への頼りになる道案内=別巻2冊

体裁：A5 判・上製・クロス装

別巻「江戸庶民」の生活を知る「解題・索引」[1-60巻] 660頁 (2016年12月刊) 978-4-908926-02-0 本体 28,000円

別巻「江戸庶民」の生活を知る2「解題・索引」[61-100巻] 614頁 (2022年5月刊) 978-4-908926-12-9 本体 28,000円

巻	【ジャンル】内容(収録資料点数) 頁数	ISBN 978-4-	本体価格 (税別)
1	【女性百科】女芸文三才図会(1点) 540頁	86688-001-3	19,000円
2	【女子教訓】女要訓和歌文庫他(2点) 280頁	86688-002-0	9,500円
3	【語彙】万宝女節用罌粟囊(2点) 350頁	86688-003-7	12,000円
4	【女子教訓】婦人教訓・女今川伊呂波文他(3点) 290頁	86688-004-4	10,000円
5	【風俗・遊女】漫画百女他(3点) 330頁	86688-005-1	11,500円
6	【諸芸】当流謡指南抄他(4点) 300頁	86688-006-8	10,000円
7	【暦占】天竺靈感観音籤他(3点) 290頁	86688-007-5	10,000円
8	【遊戯】秘事百撰・前編他(5点) 380頁	86688-008-2	13,000円
9	【仏教(臨終行儀)】孝養集他(3点) 510頁	86688-009-9	18,000円
10	【仏教(往生)】女人往生章他(3点) 320頁	86688-010-5	11,500円
11	【仏教(仏教一般)】孝子善之丞感得伝他(4点) 320頁	86688-011-2	11,500円
12	【仏教(放生)】商家繁盛・農家豊作・重宝記他(6点) 450頁	86688-012-9	16,000円
13	【語彙(通俗辞書)】畳辞訓解他(3点) 330頁	86688-013-6	11,500円
14	【語彙(通俗辞書)】寺子節用錦袋鑑他(4点) 390頁	86688-014-3	13,500円
15	【俚諺(俚諺一般)】漢語大和故事他(4点) 400頁	86688-015-0	14,000円
16	【俚諺(道歌等)】和漢詞徳抄他(2点) 330頁	86688-016-7	12,000円
17	【養生】養性百種他(6点) 430頁	86688-017-4	15,500円
18	【養生】病家示訓他(5点) 460頁	86688-018-1	16,500円
19	【産育】児相素見他(4点) 430頁	86688-019-8	15,500円
20	【産育】老婆心書他(6点) 510頁	86688-020-4	18,500円
21	【教訓】善惡道中独案内他(5点) 380頁	86688-021-1	13,500円
22	【教訓】むかしありしこと他(4点) 310頁 〈品切〉	86688-022-8	11,000円
23	【教訓】農家童子訓・海隅田草舎紙他(3点) 430頁	86688-023-5	15,000円
24	【教訓】忠孝道の栞他(2点) 400頁	86688-024-2	14,500円
25	【家政】万宝智恵袋他(3点) 310頁	86688-025-9	11,500円
26	【家政】大針刺宝他(2点) 480頁	86688-026-6	18,000円
27	【家政】錦囊智術全書(一〜三冊)(1点) 340頁	86688-027-3	12,500円
28	【家政】錦囊智術全書(四〜七冊)(1点) 320頁	86688-028-0	11,500円
29	【家政】料理秘伝抄他(4点) 320頁	86688-029-7	12,500円
30	【教訓】民家分量記他(2点) 490頁	86688-030-3	18,000円
31	【教訓】貝原先生家訓他(4点) 320頁	86688-031-0	12,000円
32	【教訓】訓蒙勸孝禄(1点) 520頁	86688-032-7	19,000円
33	【教訓】堪忍袋他(4点) 340頁	86688-033-4	13,000円
34	【教訓】ふみ鏡他(5点) 360頁	86688-034-1	14,000円
35	【教訓】利運談他(4点) 380頁	86688-035-8	14,500円
36	【教訓】童子常の心得他(5点) 360頁	86688-036-5	14,000円
37	【語彙】古版字尽他(6点) 320頁	86688-037-2	12,000円
38	【語彙】世説故事苑(1点) 380頁	86688-038-9	14,500円
39	【語彙】事物異名類編(1点) 380頁	86688-039-6	15,000円
40	【年代記】日本・唐土・二千年袖鑑他(3点) 380頁	86688-040-2	15,000円
41	【法令・教諭】御当家御制法他(4点) 340頁	86688-041-9	13,000円
42	【法令・教諭】父母状講釈他(6点) 320頁	86688-042-6	12,000円
43	【礼法】三礼口訣他(2点) 330頁	86688-043-3	12,500円
44	【礼法】日用贈答・書札辨惑集他(2点) 410頁	86688-044-0	15,000円
45	【教訓】主従心得草(初・二編)(1点) 480頁	86688-045-7	17,500円
46	【教訓】主従心得草(三〜五編)(1点) 570頁	86688-046-4	21,000円
47	【教訓】絵本清水の池他(6点) 330頁	86688-047-1	12,000円
48	【教訓】教訓・拾ひ歌他(7点) 320頁	86688-048-8	12,000円
49	【教育】武小学他(3点) 390頁	86688-049-5	15,000円
50	【教育】授業編他(2点) 400頁	86688-050-1	15,500円

巻	【ジャンル】内容(収録資料点数) 頁数	ISBN 978-4-	本体価格 (税別)
51	【教育】間合早学問他(4点) 350頁	86688-051-8	13,500円
52	【地誌】人国記他(2点) 350頁	86688-052-5	13,500円
53	【地誌】松島図誌他(3点) 440頁	86688-053-2	16,500円
54	【外国地誌】増補・華夷通商考(1点) 460頁	86688-054-9	14,000円
55	【外国地誌】坤輿図識・正編(1点) 310頁	86688-055-6	12,000円
56	【外国地誌】坤輿図識・補編(1点) 400頁	86688-056-3	15,000円
57	【教訓】為人鈔(一〜五巻)(1点) 340頁	86688-057-0	13,500円
58	【教訓】為人鈔(六〜十巻)(1点) 350頁	86688-058-7	13,000円
59	【救荒・防災】鎮火用心集他(10点) 360頁	86688-059-4	14,000円
60	【神道】神風恵草他(6点) 450頁	86688-060-0	17,500円
61	【園芸・飼育】菊花壇養種他(4点) 320頁	86688-061-7	14,500円
62	【科学(化学・物理・理学)】舎密局必携他(4点) 450頁	86688-062-4	19,500円
63	【食養生】摂生談他(2点) 380頁	86688-063-1	16,200円
64	【料理・近代家政】西洋衣食住他(4点) 350頁	86688-064-8	14,500円
65	【絵画(入門書)】画筈(1点) 310頁	86688-065-5	13,300円
66	【笑話・小咄】時勢話大全他(4点) 350頁	86688-066-2	14,800円
67	【物産】広益国産考他(2点) 590頁	86688-067-9	23,400円
68	【歌謡】大津絵婦志他(7点) 320頁	86688-068-6	14,000円
69	【教育・学問】物覚早伝授他(4点) 390頁	86688-069-3	16,200円
70	【人物辞典】古今評論早引人物故事(1点) 480頁	86688-070-9	19,600円
71	【戯文】新ばんどけ商売往来他(16点) 520頁	86688-071-6	22,500円
72	【故事・俗説】本朝俗談正誤他(2点) 430頁	86688-072-3	19,000円
73	【仏教】八宗伝来集他(4点) 470頁	86688-073-0	20,000円
74	【農業】除蝗録他(5点) 420頁	86688-074-7	18,500円
75	【絵本】絵本池の蛙他(2点) 340頁	86688-075-4	16,000円
76	【建築】雛形匠家秘伝他(3点) 400頁	86688-076-1	18,500円
77	【紀行】温泉遊草他(4点) 390頁	86688-077-8	18,500円
78	【暦】古暦便覧他(5点) 440頁	86688-078-5	19,000円
79	【気象】乗燭或問珍他(5点) 610頁	86688-079-2	24,500円
80	【地方・経済】算法入勸農固本録他(3点) 360頁	86688-080-8	16,000円
81	【旅行・交通(海陸交通)】増補日本汐路之記他(2点) 380頁	86688-081-5	17,000円
82	【災異(地震・救荒)】饑年要録他(7点) 380頁	86688-082-2	17,000円
83	【仏教(般若心経)】般若心経絵抄他(6点) 430頁	86688-083-9	19,000円
84	【祭祀(葬祭)】非火葬論他(8点) 400頁	86688-084-6	17,000円
85	【漢学(語録)】言志四録(1点) 400頁	86688-085-3	17,000円
86	【医学・本草】広恵濟急方(1点) 600頁	86688-086-0	25,000円
87	【茶道】茶道早合点他(5点) 360頁	86688-087-7	16,500円
88	【天文】運氣曆術天文図解(1点) 390頁	86688-088-4	17,000円
89	【医学・看護】古方便覧他(6点) 320頁	86688-089-1	16,000円
90	【辞書】日本釈名(1点) 350頁	86688-090-7	16,500円
91	【商業】町人考見録他(2点) 390頁	86688-091-4	18,000円
92	【商業】家業道德論他(2点) 380頁	86688-092-1	18,000円
93	【書道】臨池求源鈔他(2点) 390頁	86688-093-8	18,000円
94	【伝記】妙祐往生伝他(9点) 400頁	86688-094-5	18,000円
95	【医学・養生】こけぬ杖他(2点) 340頁	86688-095-2	16,000円
96	【測量】規矩分等集他(4点) 450頁	86688-096-9	19,000円
97	【年中行事】国朝佳節録他(5点) 470頁	86688-097-6	19,000円
98	【神道】神路の手引艸他(6点) 540頁	86688-098-3	23,500円
99	【本草・植物】草形出生・草花絵全書他(2点) 560頁	86688-099-0	25,000円
100	【画譜】絵本集草他(3点) 340頁	86688-100-3	17,000円

※
配本
経過

第1期(1〜60巻・別巻)	ISBN	刊行	本体価格
1回(1〜8巻)	978-4-283-01002-4	2012.11	¥95,000
2回(9〜16巻)	978-4-283-01003-1	2013.5	¥108,000
3回(17〜24巻)	978-4-283-01004-8	2013.10	¥120,000
4回(25〜32巻)	978-4-283-01005-5	2014.6	¥115,000
5回(33〜40巻)	978-4-283-01006-2	2015.1	¥112,000
6回(41〜48巻)	978-4-283-01007-9	2015.6	¥115,000
7回(49〜56巻)	978-4-283-01008-6	2015.11	¥115,000
8回(57〜60巻)	978-4-283-01009-3	2016.6	¥58,000
第1期・別巻	978-4-908926-02-0	2016.12	¥28,000

第1期：揃 ¥866,000.

全100巻・別巻2

第2期(61〜100巻・別巻)	ISBN	刊行	本体価格
1回(61〜65巻)	978-4-86688-101-0	2018.6	¥78,000
2回(66〜70巻)	978-4-86688-102-7	2018.11	¥88,000
3回(71〜75巻)	978-4-86688-103-4	2019.4	¥96,000
4回(76〜80巻)	978-4-86688-104-1	2019.10	¥96,500
5回(81〜85巻)	978-4-86688-105-8	2020.5	¥87,000
6回(86〜90巻)	978-4-86688-106-5	2020.11	¥91,000
7回(91〜95巻)	978-4-86688-107-2	2021.5	¥88,000
8回(96〜100巻)	978-4-86688-108-9	2021.10	¥103,500
第2期・別巻	978-4-908926-12-9	2022.5	¥28,000

第2期：揃本体 756,000.

揃 1,622,000円

＊詳細案内はホームページにて(またはパンフレット)請求を)

■第61巻【園芸・飼育】（収録4点）

菊花壇養種（きくかだんやうしゅ） 菅井菊叟作。池田英泉（溪斎英泉・池田義信・善次郎・一筆庵可候・楓川市隠）画・序。弘化3年（1846）春、一筆庵序。弘化3年春、玉英舎主人跋・刊。「江戸」和泉屋兵衛（甘泉堂）板。／菊花の栽培法を豊富な図解とともに記した園芸書。珍花・奇妙と言われる菊花は「栽培の手入の巧」が決め手（序）、その秘訣として培養、如露、風雨の手当、虫除等を記す。

金魚養玩草（きんぎょやうがんそう） 安達喜之作・序。奚疑斎増補。寛延元年（1788）9月自序江戸後期刊。「大阪」河内屋木兵衛板。／出版された金魚飼育書の嚆矢。日本における金魚の故事から執筆の経緯に触れた「金魚のものがたり」等。

厩馬新論（きうばしんろん） 竜山堂主人作・跋。藤原隣春（福島隣春・雨廼屋・花所）画。卑牧子補注。文化三年（1806）6月自跋。嘉永6年（1853）8月、無辺散人（黙翁）序。嘉永7年初刊（沢善居板）。安政元年（1854）12月再刊。「江戸」和泉屋金右衛門板。／获生徂徠の『鈴録』を参照し、多く林子平作『海国兵談』を援用しながら、己の体験・見聞や故事に基づく自説も交え、特に、馬術に志ある「小禄騎士」の者が馬を飼う秘訣を述べた書。

諸鳥飼養 百千鳥（しよちうじやうひゃせんちう） 泉花堂三蝶作・序。寛政11年（1799）10月自序・刊。刊行者不明。／飼い鳥の餌の製法や餌の与え方、飼い鳥の養生や治療など飼育全般を述べた書。たとえば餌の製法について、米の粉拵え様、摺餌青味、水を飼うと飼わざる、爪切り様、筆仕立て、羽変わりの事など27項目。

■第62巻【科学（化学・物理・理学）】（収録4点）

舍密局必携（前篇）（しやみつきよひつぎょう ぜんぺん） 上野彦馬（季溪）抄訳。堀江公肅（鉄次郎・忠雍・松澤）校・序。文久2年（1862）1月刊記。文久2年9月、堀江雍（公肅）序・刊。文湖堂蔵板。「津」伊勢屋治兵衛ほか売出。／化学実験を効率的に行うために、西洋の諸文献に基づき主要元素の「稟性・親和力・異重力・効用、其他各材ノ成分・配合・分量等」を抄訳して図解を施した化学入門書。「舍密」は蘭語 chemie の訳語（化学の意）。当時最先端の科学史の一資料。

硝石製造辨・作焰硝製造方（しやうせきせいぞうへん・さくえんしやうせいぞうほう） 佐藤信淵（椿園・元海・百祐）作。嘉永7年（1805）2月、奎文老人序。嘉永7年7月刊。「江戸」和泉屋半兵衛板。／火薬の原料・硝石製造法の技術書。住居の床下から掘り起こした土から硝酸カリウムを析出して硝石を製造する「古土法」と、藁・草・木の葉に石灰や糞尿をかき混ぜた土を硝石小屋に積み上げ、定期的に糞尿をかけて四、五年経過した後には硝酸カリウムを抽出する「硝石丘法」の二つを多くの図解を交えて解説。

気海観瀾（きかいかんらん） 青地林宗（青地盈・芳澣）作。篠田忠元（順）校。文政8年（1825）12月、著者凡例。文政10年7月、桂川甫賢（国寧・桂嶼・清遠）序・刊。芳澣園（著者）蔵板。「江戸」和泉屋吉兵衛（名山閣）売出。／日本で初めて刊行された本格的な物理学・気象学書。著者が翻訳した蘭書『格物総凡』（J. Buys, Naturkundig Schoolboek（物理学教科書）（1798））から「気性」関連を抜粋・編集。体性、引力、気重、窒気、燃気、光、色、音、風、越列吉的爾（エレキテル）質、気化、虹、暈、潮汐など全40項目。

慈石論（じしやろん） 石井磯岳（光致・磯岳亭）作。文政10年（1827）10月作・刊。著者蔵板。「江戸」千鐘房（須原屋茂兵衛）売出。／中国の文献等によりながら磁石に関する知見や故事をまとめ、その起原を考察した、磁石に関する本邦最初の文献。鉄と相性が良い磁石が太陽が盛んな南方を向くという原理を応用した方位磁針等。

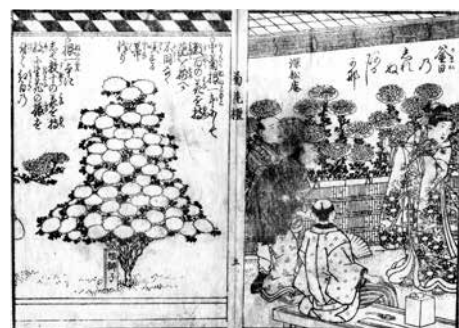
■第63巻【食養生】（収録2点）

摂生談（せつせんだん） 近藤隆昌（近藤明・泉海・文溪）作。文化12年（1805）10月序。同年月、近藤隆二凡例・跋・刊。「大阪」聞喜堂ほか蔵板。本書以前の数多くの養生書の中から「食療（食養生）」に関する事柄を選んだもの。全二巻、本文全て仮名交じり文。「進養生説三章」「脾胃調養法十八条」。

食療正要（しやうりやうせい） 松岡玄達（恕庵・成章・怡顔齋）作。松岡典（定庵・子勅）校。明和5年（1768）3月、膝惟寅（浅井図南）序。明和6年1月、中山玄亨（蘭渚）跋。明和6年9月刊。「大阪」柳原喜兵衛ほか板。／食養生（食療）を説いた医学書。全13部344項の食品について異名、外見その他の特徴、気味（味覚や毒性の有無）、主治（効能）、禁忌などを詳しく記す。

■第64巻【料理・近代家政】（収録4点）

西洋衣食住（しやうしやういじゆう）（2種） 片山淳之介（福沢諭吉）作・序。慶応3年（1867）12月序・刊。「江戸」慶應義塾板。／図解で紹介（三部構成）。「衣之部」は、多くが男性用衣服で、用途・形状・素材、また着用・装飾の心得等にも言及。「食之部」は、最小限の食事マナーや饗応時の酒について



(61巻)



(62巻)



(63巻)

も触れる。「住之部」は、西洋人の身嗜みや、室内の土足やベッドでの就寝など日本とは異なる生活習慣について述べ、末尾に、十二時法と西洋時計の見方を説明。

万宝玉手箱(初篇) (杉田成卿(杉田信・梅里) 編訳・序。安政5年1月自序。安政5年2月作・刊。「江戸」天真楼蔵板。「江戸」山城屋佐兵衛ほか売出。／海外の著作の中から生活に役立つ「簡便利用の方法」を集め、雑多な備忘録を加えた。西洋の科学的知識を活用した生活上の工夫が目立つ。

《日用助食》**竈の賑ひ(竈賑)** (大蔵永常編。江戸後期刊。「江戸」石井佐太郎ほか板。／主として都会でその日暮らしをする人々に対して、飢饉時の救荒食、特に米や雑穀や野菜を混ぜた「かて飯」を主とする救荒食の作り方や効能その他の関連知識を紹介した書。

《料理調菜》**四季献立集** (秋山子編・序。天保7年4月序・刊。「名古屋」永楽屋東四郎ほか板。／初心者にも分かりやすく四季料理の献立と調理法を解説した料理書。二汁五菜、鱈之部、酢之部、四季附込之部、平之部、四季鉢肴、井物之部など、調理法や諸注意を簡条書きで簡潔に記す。

第65巻【絵画(入門書)】(収録1点)

面笠(かんざ) (林守篤(魯軒) 編・序。正徳2年1月自序。享保6年7月、平住専安序。享保6年6月刊。「大阪」河内屋吉兵衛ほか板。／絵画入門書。狩野派秘伝の暴露本となったが、絵を独学しようとする者には、理論と実技の解説、図様の実例などが懇切に用意された便利なハウ・ツー本として、大いに歓迎され、版を重ねた。

第66巻【笑話・小咄】(収録4点)

時勢話大全 (橘香亭瓶吾作・序。高橋栄治軒書。安永6年(1777)1月刊。「大阪」渋川久蔵板。／絵入りの小咄集。大半が半丁程度の短編で全5巻に50話を収録。小咄の題目と出典のみを示した箇所もある。随所に咄本の広告を掲げる。早説法、旦那臈眞、弥陀の光、孝行白、住吉詣、夜明の山葵、戎膳、真田山、井の内蛙、見せ大根、等。

しみのすみか物語 (石川雅望(六樹園・宿屋飯盛・蛾術斎) 作・序。司馬江南(俊) 画。享和2年(1812)8月、大郎詔(周斎) 序。文化元年1月、朝田保清跋。文化2年(1805)春刊。「名古屋」永楽屋東四郎板。／『宇治拾遺物語』風の擬古文・平安説話集風の雅文で書かれた笑話集。当時の題材の他、中国説話集や漢文笑話集からも着想を得た話からなる。上下二巻、合計55話。色好の男簾の際より女をみる事、丹後国の痴人竜宮に行たる事、等。

奇談新編 (淡山子作。紀洋子、高村幹斎補。天保13年(1823)5月、三橋子序・刊。「江戸」松濤館蔵板。「大阪」象牙屋治郎兵衛ほか売出。／長短含む49話から成る漢文笑話集。独創のみでなく和書や漢籍からの翻案も多く、著述と編訳が相互に混じり合った日中混成作品。種々の奇談に潜む寓意を読み取ることを読者に促す。

古今秀句落し噺 (景斎英寿(二代目一筆庵・一筆斎・吉泉子) 作。弘化元年(1824)春、溪斎英泉(一筆庵・楓川市隠) 序・刊。「江戸」本屋又助板。／古今の秀句を題材にした短編笑話集(咄本)。いずれも最後に落ちを付ける小咄で、半丁程度の短文から数丁に及ぶ長文もある。富士、梅見、桜、吉原、松竹梅、骸骨、大晦日、夕立、等15話。

第67巻【物産】(収録2点)

広益国産考 (大蔵永常(黄葉園主人) 作。天保15年(1844)1月作。安政6年(1853)9月初刊。「大阪」豊田屋宇左衛門ほか後印。／江戸後期を代表する農学者の集大成的農書で、諸国特産品や加工品の知識技術、農業経済上の心得等を多くの図版を交え記す。全8巻。最も詳細な農書として影響は近代以降まで及んだ。国産を拵ふる心得の辨、杉の木仕立方の事、土地風氣の辨、蕨を織る指南、蕨、醤油、木綿、養蚕、蜂を畜て蜜をとる事、農家の益となるべき植物の事、等。

国産考 (大蔵永常作。松川半山画。天保13年(1843)3月刊。「京都」丸屋善兵衛ほか板。／前掲書に先立って冒頭2巻のみを刊行したものであるため、表紙・巻頭・巻末などを参考資料として抄録。

第68巻【歌謡】(収録7点)

大津絵婦志 (一荷堂半水(情夫・狭川峯二・佐川峯二) 作・画。安政年間(1854-59)刊。「大阪」板元不明。／三味線の調子を派手で陽



(65巻)



(64巻)



(66巻)



(67巻)

気な二上りで歌う単純簡潔な俗曲、当時の流行歌・戯歌であった大津絵節を半丁に1曲ずつ収め挿絵を添えたもの。よし原言葉、降物づくし、梅と月の色事、江戸歌づくし、なにやらの名よせ、天神まつり、など27曲。

どいつ図会 (どいつ) 梅暮里谷峨二世 (古久我・萩原乙彦・歌沢能六斎・金竜山人・鈴亭) 作・序。歌川国郷 (立川国郷・立川斎) 画。文久2年 (1862) 3月、松島庵主人序・刊。『江戸』刊行者不明。▽俗謡 (都々逸) 集。前半部に情歌48曲の他約70曲、後半部に小編の三味線声曲集等約30曲を収録。上方唄、清元節、常磐津節などの流派や、本調子、二上り、三下りといった三味線調弦法も付記する。

調子附替唄入 端唄独稽古 (りゅうしつけかへうたい) 光盛舎作丸編・序。光斎 (歌川芳盛・一光斎・さくら坊) 画。安政3年 (1856) 4月、夏自序・刊。刊行者不明。▽「光盛連」と称する端唄連を主とし、編者自身も含む十数名の作品を集めた端唄集。作品毎に作者名や住所を記す (江戸橋てつ、桜川我幸、上広光盛連よね丸、等)。

哇節用集 (わしせつ) 梅暮里谷峨二世編・序。光盛舎佐久丸 (作丸) 画。光斎書。初編…安政4年 (1857) 1月、金竜山人序。二編…安政4年春、金竜山人序。『江戸』刊行者不明。▽女子用往来や女用文章に頻出する名歌やその他の記事、消息例文等に端唄や都々逸を盛り込んで編んだパロディ・戯文集。ちらし文のかきやう、年中用文章書様替唱 (夜ざくら、夏は両国、萩桔梗、枯野、等)、七小町詠歌度独逸、「哇 (はうた)」という名称の由来、等。

はうた用ぶん章 (はうたよう) 梅暮里谷峨二世編・序。光盛舎佐久丸画。光斎書。安政4年 (1857) 1月、金竜山人序・刊。『江戸』刊行者不明。

前掲書の前半部 (初編) のみを抜粋した改題本。ほとんど重複するため、冒頭部と末尾のみを収録。
はうた手おどり稽古本 (はうたておどり) 十返舎一九作・序。江戸後期刊。『江戸力』まつ金板。▽端唄踊りの舞踊法を図解した教則本。割注形式で仕草・動きの略注と図解を添え、曲毎 (全11曲) に衣装の色を変えて見やすくする工夫も見られる。

新ばんはうたおどりひとりげみこ (しんはんはうたおどりひとりげみこ) 歌川芳晴 (一寿斎・一梅斎・朝香楼・芳春) 画。江戸後期刊。刊行者不明。▽前掲書と類似の端唄踊りの教則本だが、こちらは舞踊の図解を中心に大きく掲げ、より詳細に説明。本文末尾で舞踊稽古の秘訣も助言する。やまがあり、あだながほ、一とよをはり、のぼりくだり、一とよあくれば、の5曲。

第69巻【教育・学問】 (収録4点)

物覚早伝授 (ぶつさくさうでんじゆ) 呉門先生作。久保田雲亭校。山本一馬・拙堂癡人序・刊。明和2年 (1765) 3月、山本一馬序。

明和8年秋、拙堂癡人序・刊。刊行者不明。▽作者伝授の種々の記憶法を記した書。後篇予告があるが未刊。本書の記憶術は卑賤ながら極めて実用的と述べ、具体的な記憶術を展開。擬託法 (学而) を「字を書く」と借転、種子法 (一二三四等の順序を記憶のよすがとする)、器物験証、心法、無形有形、源氏験証等12項目。

間合早学問 (かんあひさがくもん) (くもんさくもん) 大江玄圃 (久川頼負・大江資衡・樺圭) 作。近藤正信 (国宝) 校。藤応拳 (仲選) 訂。安永2年 (1773) 2月自序・刊。『大阪』河内屋新治郎板。▽漢学入門者のために仮名書きで学問の要点を記した『間合早学問』 (同作者・明和3・1766 / 本文庫51巻所収) の後編として編まれたもの。『唐土代々の事を委く記し…詩の作りやう、平仄・韻字の押やう、書家の心得…画賛の仕やう…朱青墨印肉の拵やう秘伝…を詳にあらはし、いかなる無学の人々も、ならわうして忽ち学者となり玉ふ…』

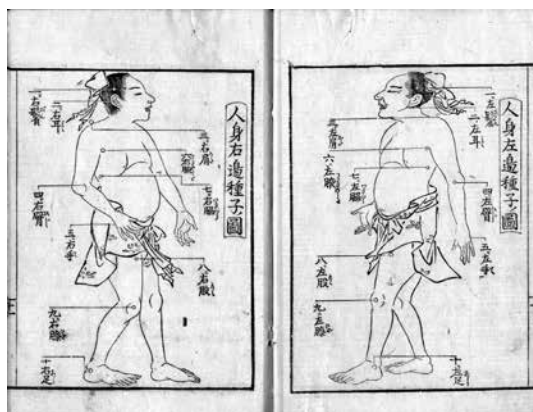
一覽博識 (いちらんはくしき) 茹蘆山人作・序。安永9年 (1780) 10月初刊。文化9年 (1812) 7月求板。『江戸』永楽屋西四郎求板。▽漢学入門者に経書や関連の初歩的知識を記した書。基本的な儒教経典・十三経 (易经・書経・詩経・三礼 (周礼・礼記・儀礼)・春秋三伝 (左氏伝・公羊伝・穀梁伝)・論語・孝経・孟子・爾雅) や中国歴代の正史・二十一史、六経、文章や詩の諸体系等。

文教温故 (ぶんきうおんこ) 山崎美成作・序。文政11年 (1808) 1月序、同年刊。『江戸』和泉屋庄二郎ほか板。▽初学者のために学問の要諦や心得を体系的に述べた書。いずれも故実や典拠を逐一提示・引用しつつ計10章68項について概説。文学、学校、経籍、訓点、読法、文字、文章、詩賦、和歌、印板の分類。

第70巻【人物辞典】 (収録1点)

古今評論 早引人物故事 (ここんひんろん さういんぶつごふ) (収録1点)

河内屋茂兵衛ほか板。▽神代から近世まで、外国人や伝説上も含む約1800人を収録したイロハ引き日本人物辞典。耳慣れた読み方で童蒙の引きやすさを重視、例えば、人名第一音と訓読 (よみこえ) の音数で引く、「伊勢」なら「い・二」、「和泉」なら「い・三」等。



(69巻)



(68巻)



(70巻)

第71巻 【戯文】（収録16点）

〈新ばんおどけ〉商売往来（しんばんおどけ） * 立田土瓶作。江戸後期刊。「大阪」本屋安兵衛（松栄堂）板。▽『商売往来』（元禄7・1694年）に做った戯文で、遊女の心得や通用の語句を書き記した準往来物。

厄払ひ商売往来（うばひあらいし） * 立田土瓶作。江戸後期刊。「大阪」本屋安兵衛（松栄堂）板。▽鼈甲屋・筆屋・豆腐屋・紺屋・張形屋・人形屋を題材に、除災招福の趣きを七五調で綴った6項の戯文。

おどけていきん 道楽往来（おどけていきん） * 華山亭呼升作。江戸後期刊。「大阪」刊行者不明。▽『商売往来』にならって道楽者の生涯を書き記し戒めとした戯文。幼少の頃より悪行の限りを尽くして手習い学問には身を入れず、親や師匠の異見は聞かず、奉公先でも全く勤まらず、成人するに及んでさらに遊興に耽った成れの果てを示す。

大坂色里名寄づくし 京名所かへ文章（おおさかいろなよづくし） * 十扁舎一九（世系不詳）カ／江戸後期刊。「大阪」本屋安兵衛（松栄堂）板。▽京都の由来や京周辺の名所旧跡を紹介する『京名所（洛陽往来・都往来・都巡とも）』の文章に似せて新町遊廓を始めとする大坂の遊廓と遊里風俗を記した戯文。

滑稽道外案文（けっかいだうがいあんぶん） 鼻山人（細河並輔・東里山人）作。松亭金水（中村経年・保定・金水道人）序。溪斎英泉（池田善次郎・池田義信・一筆庵可候・楓川市隠）画。江戸後期（文化頃）刊。「江戸」玉泉堂（布袋屋市兵衛）板。▽『附会案文』（享和4・1804年）を模倣した滑稽本。奇抜な題材で綴った戯文である。「書札妙智力難文」と「諸用附会奇妙案文」の二部からなり、前者は冒頭に絵目録を掲げた18通、後者は22通を収録、本文の途中に著者が士農工商別に詠んだ狂歌4首も掲げる。数種の異板があるが、本巻には『滑稽道外案文』『どうけ用文』の2種を収録。

虫三ヶ仲間洗濯所え願出（むしさんけなかへがなせんと） * 桂文治カ／江戸後期（天保頃カ）刊。刊行者不明。▽表紙に擬人化した蚊・蚤・虱の三者に対する「洗濯所」の申し渡し風景を描く、虫三ヶ仲間に対する洗濯所の申し渡し「洗濯所より御申出しの事」と、それに対する「乍恐奉願上候三ヶ仲間より口上書」の二通から成る戯文。自らの不埒を人間の迫害などに責任転嫁する滑稽な戯文に作る。

いたづらの製菓種（いたづらのせい菓しゅ） 作者不明／江戸後期刊。刊行者不明。▽（石見）銀山御製種より鼠共人御申出之事（鼠共え申渡しの事）と「鼠仲間より願ひ出る事（鼠共奉申上候口上書）」の二通の書状形式で綴った戯文。前者は石見銀山製菓所から鼠仲間宛の文書で、鼠どもが迷惑千万で、ますます不埒な働きをなすので、慎まなければ毒菓（砒素）で皆殺しにしようと言ひ渡す。それに対する後者は、鼠仲間惣代から石見銀山製菓所宛の文書で、鼠達が置かれた食糧難の窮状と事情を訴え、己の正当性を主張し、今後は善良な福鼠になるべく努力するので鼠を根絶やしにする毒殺を中止して欲しいと訴える。

乍恐奉願ひ上候魚仲間より返答書ほか（あつそふねがみかみかえかきよりへんたうし） * 立田土瓶作。長秀画。江戸後期刊。「大阪」本屋安兵衛（松栄堂）板。▽「魚仲間返答書」と「青物仲間口上書」の二種を収録。前者は魚介類が人間を養う重要な食物であり、人間生活と密接であるかを述べ、魚仲間を重視して欲しいと訴え、後者は青物が日々三度の食事に不可欠で人間生活のあらゆる場面で活躍するなど、青物仲間を上位に位置づけるよう懇願。魚仲間と青物仲間の対立を題材にした戯文。

青物づくし・くちあい 奉公人請状之事ほか（あおものづくし・くちあい） * 梅翁作。江戸後期刊。「大阪」本屋栄次郎板。▽奉公人請状と宗旨手形を模した二通から成る戯文。第一通は、松茸屋志免治郎に対して奈良漬屋瓜四郎が奉公人ふきの身元を保証する形式の請状として書かれ、文面に多彩な青物類を盛り込む。第二通は、文中に多くの魚類の名称を織り込んで綴った宗旨手形風の戯文で、全文に地口やもじりが込められている。

百人一首 地口絵手本（ひゃくにんいっしゅ） 梅亭樵父作・序・画。江戸後期刊。刊行者不明（「名古屋」東壁楼の書籍広告付）▽『小倉百人一首』の下の句のみを掲げ、それをもじった地口と挿絵を掲げたもの。

道戯百人一首（どうげひゃくにんいっしゅ） 山東京伝（岩瀬醒・北尾政演・醒斎・菊亭主人）編・序。享和4年（1804）初刊。江戸後期後印。「江戸」鶴屋喜右衛門（仙鶴堂）板（序文）。▽歌舞伎の道化方が笑いを誘うような滑稽味を主とする狂歌を集めた異種百人一首。本書を古くから伝わる「小倉山の百首の翻案」ともじりとし、これが道化方に似ていることから『道化百人一首』と称したもの。巻頭に「職人八景」と題した狂歌8首と挿絵を掲げる。

どうけ百人一首（どうけひゃくにんいっしゅ） 作者不明／文化5年（1808）刊。「江戸」和泉屋市兵衛板。▽前掲『道戯百人一首』と同様に、滑稽主体の狂歌集・異種百人一首。江戸前期から伝わる『道外百人一首』の改編本と思われる。本文は、半丁四コマの枡目に挿絵を添えて100首を収録する。また巻頭に三夕の和歌を掲げる。また、異本の江戸後期（安政六年）の書き入れあり）刊『道外百人一首』（柱題「どうけ百人」）も収録したが、巻頭の和歌と挿絵が全く異なるうえ、本文にも種々異同が見られる。

道外三十六歌仙・新撰なぞづくし（どうがいさんじゅうろくか） 作者不明。江戸後期（天保頃）刊。「江戸」山口屋藤兵衛板。▽三十六歌仙に見立てて、和歌三神・六歌仙・三十六歌仙・中古三十六歌仙・小倉百人一首・女房三十六歌仙から任意に選んだ和歌36首をもじった狂歌集。頭書に76題の謎かけ集を掲げる。



笑艸三十六歌仙 (わらいくささん) 作者不明／江戸後期刊。刊行者不明。▽。『小倉百人一首』等の和歌をもじった狂歌を半丁六首ずつ、合計36首を収録した青色刷の小冊子。本文等に挿絵はないが、上巻表紙に衣冠姿の歌人を描く。**馬鹿三人酒づくしきやうくん** (ばかさんしゅくしきやうくん) 作者不明／江戸後期刊。『江戸』三ツ木板。▽『小倉百人一首』等の和歌を題材に、三十六歌仙に見立ててもじった狂歌を集めたもの。刷表紙に三人の馬鹿者を描いた小冊子。いずれも飲酒に因んだ滑稽な狂歌ばかり36首を挿絵と共に掲げる。

《通客必用》算法珍書 (つうきゃくひよう さんぽうしんしよ) 洒落斎唐人(柳川春三・喫霞楼仙客・喫霞仙人) 作・校・序。鼓腹庵狸友校。明治元年(1868)12月、ゆめのや桜痴(福地桜痴・福地源一郎)序。明治2年春刊。『東京』上州屋惣七(中外堂)板。▽書名は和算書『算法新書』のもじりで、どの問題も戯文で珍問を31題掲げるが、単なる戯文に止まらず、文明開化期の社会における皮肉や諷刺が随所に込められており、「我国最初の西洋数学者」たる著者による「維新革命に際して、稀に見る所の、最もナンセンス味ある一数学書」(小倉金之助)と評される。

■第72巻 【故事・俗説】 (収録2点)

本朝俗談正誤 (ほんしやくだん せいご) 作者不明。元禄3年(1686)8月序。元禄4年7月刊。『京都』書林(某)板。▽俚諺・伝承・俗説等の典拠やその正誤を改めた書。寛永年間に「伊東氏某左近将監某」が童蒙に示した教訓書を平易な仮名書きの俗文に改めたもので、合計70話を収録する。諸説の正誤を改め荒唐無稽な俗説を否定し、多く出典等を明記するなど考証的態度で記述する。

和漢故事談 (わだん じふだん) 挙扇堂静栄作。宝永元年(1704)、昌陽軒序。寛延元年(1748)11月求板。『京都』岡権兵衛板。▽和漢の諸書から種々の故事・奇談・善事等、合計279話を集めて解説し、出典を示した書。宝永1年5月刊『和語連珠集』(『京都』島崎忠兵衛ほか板)の求板改題本。

■第73巻 【仏教】 (収録4点)

八宗伝来集 (はっしゅう だんらいしふ) 作者不明。正保四年(1691)11月刊。『京都』平田半左衛門板。▽日本に伝来した仏教の八宗派、すなわち、南都六宗の法相宗・三論宗・俱舍宗・成実宗・律宗・華嚴宗と、平安二宗の天台宗・真言宗が日本に伝播した経緯や諸宗の概要を問答形式で記した書。鎌倉新仏教である禅宗・浄土宗・日蓮宗・時宗の成立・展開・本地(本山)等も述べる。

仏道問答 (ぶつどう もんどう) 智詔作。亮融(豁堂)跋。享保6年(1721)閏7月作。文政11年(1838)、松平定常(池田定常・池田冠山・不軽居士・君倫)序。刊行者不明。▽問答形式で仏道や修行のあらまし全12問について説いた書。仏道修行の根本は信心であると論ずる。

仏道手引草 (ぶつどう ていりくそう) 大賢鳳樹(石竜道人・芻狗子)作。文政2年(1819)8月作。文政3年3月、木雞敬序・刊。『仙台』輪王藏板。『江戸』和泉屋庄次郎製本。▽和漢の諸書を参酌しつつ仏教の歴史や仏教史上の人物故事、また仏教の根本教義を平易に説いたもの。

不思議問答 (ふしぎもんどう) 甌山作・序。東南画。天保13年(1842)序・刊。『京都』中尾三衛門ほか板。▽それぞれ二人の人物や二地域でやりとりされる問答や問答歌の形式で綴った絵入りの通俗教訓書。仏説由来の言説に止まらず、教訓的な戯文も多く含む。

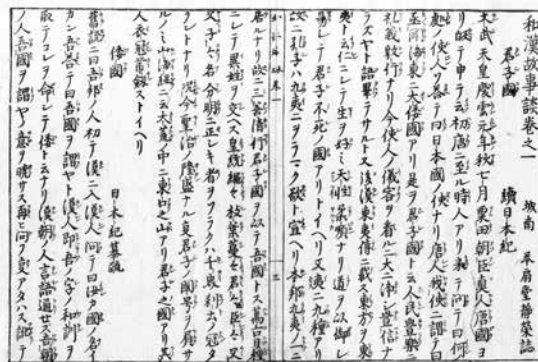
■第74巻 【農業】 (収録5点)

除蝗録 (しゆりやく) 大蔵永常(黄葉園)作・跋。長谷川雪旦(宗秀・一陽庵・岩岳斎)画。文政9年(1826)1月、奥山翼序。文政9年2月、黄葉園跋。文政9年3月、佐藤担(一斎)序・刊。『江戸』黄葉園(著者)蔵板。▽農業による害虫駆除法を説いた最初の文献で、凶作の主要因である害虫特にウンカ(浮塵子)の駆除に鯨油が効果的なことを述べ、鯨油の使用方法を論じた農書。作者は既に『老農茶話』や『豊稼録』で害虫駆除について説いたが、版木焼失のため、さらに詳しい本書を改めて刊行した。

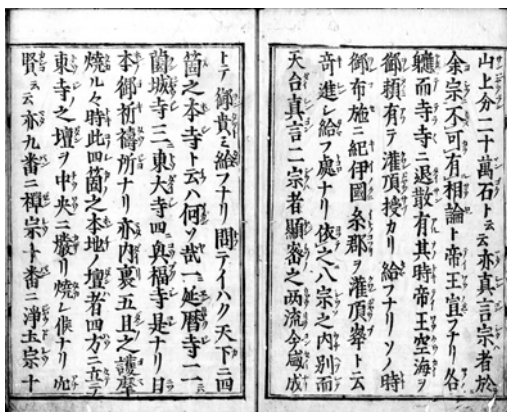
農業要集 (のうぎょう ようしふ) 宮負定雄(佐平)作・序。文政9年(1826)3月作・自序。文政9年6月、平田篤胤序・刊。『下総国香取郡』著者蔵板。

▽宮崎安貞編『農業全書』(元禄10・1697年)に漏れた事柄と、作者が「種芸」を勤めて自得した知見のうち同書と異なる事柄をまとめた農書。農人の日用業務に関する記事も収録し、市場における「値段割合」など農業経営上の知識の重要性を訴え、下総国における農作物の標準的な値段を明記した点が注目される。

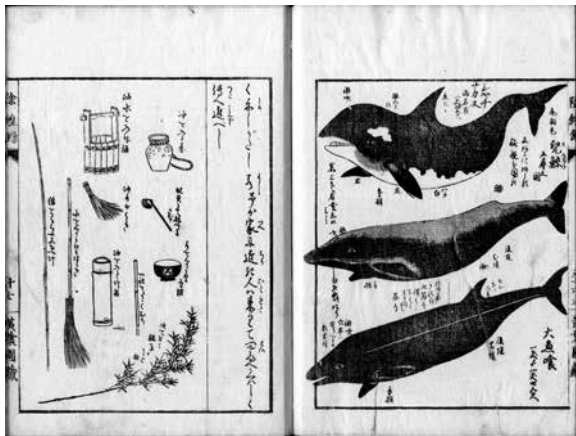
穂立手引草 (ほだてて びきぎて) 醉吟子(醉吟居)編・序。篠原遷外画。文政11年3月(1828)刊記。同年6月自序・刊。『江戸』西成堂蔵板。『江戸』岡田屋嘉七ほか売出。▽五穀や農事関連の故事、また、穀類の栽培、特に選種について記した農書。図解を交え、俗語で詳述し、編者自ら実証済みの



(72巻)



(73巻)



(74巻)

知見と太鼓判を押す。挿絵も豊富。

農業家訓（もうきん）伊藤正作（信前・耕楽舎）作。貫名苞（海屋・子善・松翁）序。天保10年（1839）2月序。天保10年7月作。天保11年刊。「若狭」寧止堂蔵板。▽若狭国河原市村（現・福井県美浜町）の庄屋である作者が、先行農書の数々を参酌しながら北陸に適した知見をまとめた農書。

種々の農業技術を合計34カ条にまとめる。自ら試して利得を確認できた知見を記したことに言及した上で、金銭才覚のある農人、百姓の忠勤、人真似ではなく人に先んじて努めるべきことなどを論ず。

農家心得種（のうかこころ）手塚敬義（含章）作・序。永嶋頭（安竜）校。天保14年（1843）9月自序・刊。「江戸」文溪堂（丁子屋平兵衛）板。▽著者自身の体験や見聞を種々の文献と照らし合わせながら、農家の急用に備えるために、主に農家に身近な植物・食物に関する保健衛生上の知識や心得を一冊にまとめた簡易な農民必携・生活百科。農村の生活心得や処世訓全般にわたって縷々説いている。

■第75巻【絵本】（収録2点）

絵本池の蛙（えほんのいけのかはづ）東鶴（赤松堂）作・序。西川祐信（自得叟・文華堂）画。延享2年（1745）初刊。明和5年（1768）1月再刊。「京都」菊屋喜兵衛求板。▽『枕草子』の「ものづくし」に準じ、各巻の歌題として詠んだ狂歌と挿絵で構成した絵本。いづれも、世俗の日常生活における一場面をとらえた「憎い」「おかしい」「嬉しい」事柄を、あるいは皮肉や揶揄、あるいは滑稽や共感を込めて詠んだ狂歌81首を収録。祐信の挿絵も当時の世相や風俗を生き生きと映し出す。

神事行灯（しんじあんどう）初編…大石真虎（小泉真虎・樵谷・軀舎）画。二編…花笠文京（花笠外史）序。歌川国芳画。三編…小笠山樵（疎放）序。溪斎英泉（池田英泉）画。四編…歌川国直画。五編…一筆庵英泉（溪斎英泉）画。初編…文政12年（1829）4月、乗清序。四編…天保13年（1842）4月、松亭序。五編…弘化4年（1841）夏、小笠老樵序。文政12年、弘化4年初刊。明治初年再刊。「名古屋」紅梅園蔵板。「名古屋」永楽屋（片野）東四郎（東壁堂）売出。▽川柳・狂句・地口に色刷挿絵を添えた絵本ならびに絵手本。

■第76巻【建築】（収録3点）

雛形匠家秘伝（ひながたしやのかた）広丹農父作。享保12年（1727）5月初刊。宝暦14年（1764）4月再刊。「江戸」須原屋茂兵衛板。

▽江戸中期の木割書の一つで、日本建築における規矩準繩を示したものの。木割りとは、建築の部材寸法を実寸法でなく他の部材との比例（割合）で示す方法で、初めは部材の木取りを目的とした技術であったが、後には組上げまで規定するように発展した。上巻には、和漢の尺、寸尺の異名、占ト・家相等の基本から、造営物における各部材の寸法や図解などを掲げる。下巻には「角行のび定法（ひらのつるのび定法・角のび定法）」「たる木をくばる法」の解説等で、繁榎・亜繁榎（半しげ）・吹奇榎等の垂木割や、「がんぎがね法」「扇野法」など軒廻りの図解、また、角木（隅木）の比率や垂木割の簡易な計算方法を示す。

大工雛形秘伝書図解（おおいしひながたしやのかた）文照軒一志作・序。西村権右衛門画。享保12年（1727）7月自序。享保12年12月刊。「京都」永田調兵衛板。

▽江戸中期を代表する規矩術書。規矩術は、指し矩を用いて垂木や隅木などの建築部材の実形を幾何学的に割り出し、材木に墨付けをする技術で、その淵源は古代まで遡るが、現代の規矩術に連なるのは、和算の発達に伴い高度に理論化された江戸時代の規矩術。本書は、隅矩術（軒規矩術）に関する本邦最初の出版物とされる。2巻から成り、乾巻は軒規矩術全般について図解し、20項を収録。坤巻は、堂塔・拝殿等の木割や車寄小柱や擬宝珠の割付などを図解した木割書で、13項を収録。参考のため、江戸後期後印本（「江戸」須原屋茂兵衛板）も抄録。

俗説正誤匠家必用記（しやくせつせいごしやのかた）立石定準作・序。宝暦5年（1755）自序。宝暦6年1月、原益（友諒・鶴臯）序。宝暦6年4月刊。「江戸」須原屋茂兵衛板。▽番匠の祖神に関する諸説を検討し、番匠祖神が手置帆負命と彦狭知命の二神であると結論づけ、その神徳や祀り方を説き明かし、また、宮造りから鳥居に至るまでの故実や、屋造りの吉凶等を述べた書。上巻は「神国神道、并二両部習合の大意」など11項、中巻は「陰陽の二神八尋の宮殿を化立給ふ事」など10項、下巻は「地鎮の神事」など17項を収録。各巻に挿絵数葉を載せ、下巻には社殿等の雛形を多く掲げる。

■第77巻【紀行】（収録4点）

温泉遊草（おんせん）深草元政（日政・霞谷妙牛子・草山妙子（妙子）・石井元政）作。片山松庵（朴元）編・序。寛文8年（1668）12月、松庵朴元序・初刊。明治初年後印。刊行者不明。▽作者が二度にわたる有馬温泉での湯治旅行の模様を記した漢文の紀行文と旅中の折々に詠じた詩歌を収めたもの。①寛文5年9月の「温泉遊草」、②寛文7年2月の「温泉再遊」と、両作品の間に挿入した③片山作「悼霞谷山人詩并序」から成る。①は京都出発後の道中を記し、温泉の祭神である大己貴命・少彦名命以来の温泉関連の故事を種々記す。②は、湯治の効果を実感した作者が再び有馬



(76巻)



(75巻)

を訪れるまでの経緯や漢詩文や和歌6首。③では、深草の略歴と恩師追悼の七言絶句7編を掲げる。

相馬日記 (そうま) 小山田与清 (文儒・高田与清・平与清) 作。北条時鄰注。大寂庵立綱序。歟形蕙斎 (紹真) 画。文化15年 (1800) 4月、大石千引跋。文政元年 (1818) 5月、藤原常彦跋。文政元年8月、玄雅序。文政元年、喜多村節信跋。文政元年10月初刊。明治初年後印。「大阪」群鳳堂ほか板。▽文化14年8月17日に江戸神田川沿いの自宅を出発して下総国相馬郡の平将門城跡等を巡って、8月27日に江戸に戻るまでの11日間の旅行記。一巻は、江戸神田川辺下総国豊田郡水海道村。二巻は、水海道村下野国都賀郡日光領。三巻は、下総国相馬郡筒戸村下総国下埴生郡成田山新勝寺。四巻は、印旛郡伊篠村下江戸。各地の古跡に因む故事や地名の由来、名所和歌等を紹介する。また、頭書に記紀万葉をはじめ、多数の古典文献によって詳細に施注する。各巻に風景図、「三宝寺・豊島氏城跡周辺」「羽生村・法蔵寺・累ヶ淵」「真間国府台」など。

鹿島日記 (かしま) 小山田与清 (文儒・高田与清・平与清) 作。滝山知之校・序。真斎英笑画。文政5年 (1823) 7月、長谷川宣昭・滝山知之序。文政5年7月、沢近嶺跋・刊。刊行者不明。▽文政3年9月7日に江戸を出発して、千住、松戸、小金、柏、我孫子、取手、神崎、佐原、香取神社、潮来、鹿島神社、延方、息栖神社、銚子、八日市場、成田、酒々井、佐倉、船橋、行徳を経て11月6日に帰宅するまでの旅行記。道すがら各地の知人や門人を訪れ、種々の講説を行い、あるいは和歌を贈答し合っている。また、適宜、地名を考証し、名所旧跡の故事来歴や金石文を紹介し、種々の文献を引用する豊富な地誌的記述とともに、各地の風趣や旅情も伝える。序文で長谷川は、旅日記の多くは旅行後に記したもので錯誤が多く、本書のように旅行中に記したものは稀であると述べる。

やをかの日記 (やのか) 岩雲花香 (岩雲大人) 作・序。精々翁培山画。片野善長 (永楽屋東四郎) 跋。天保2年 (1831) 6月、阿波の国人序・刊。「名古屋」永楽屋東四郎板力。▽伊豆国田方郡多田村 (現・伊豆の国市韭山) に住む友人の訪問を機に思い立った富士登山の8日間 (天保2年6月15〜22日) の旅行記兼歌集。その後合流した二人とともに伊豆・多田村を出発。出発直前の感興を詠んだ「望の夜に降りける雪をよく見むと、富士の高嶺に明日は登らむ」の一首を冒頭に掲げる。早朝に荒木神社を参拝し、長崎村、三嶋神社、深良村を経て富士の裾野で1泊。翌朝に富士浅間の宮を参拝し、箱根の海水を眺めながら旅を続け、岩室で宿泊し、いよいよ登頂に挑むが、その感慨を12首の和歌で表現する。下山後も再び富士浅間神社にお礼参りをし、裾野・三島に宿泊した後、22日に伊豆・多田村に帰着し、和歌一首で結ぶ。文中に挿入した和歌は31首。

第78巻【暦】 (収録5点)

古暦便覧 (べんらん) 吉田光由 (久庵) 編序。慶安元年 (1648) 5月、久庵序。万治2年 (1659) 4月刊記。延宝元年 (1673) 頃後印。

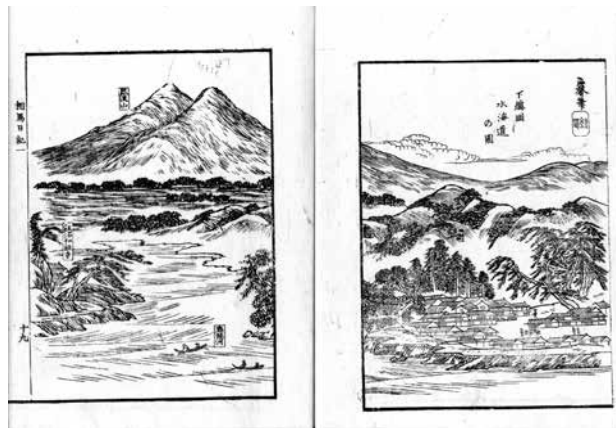
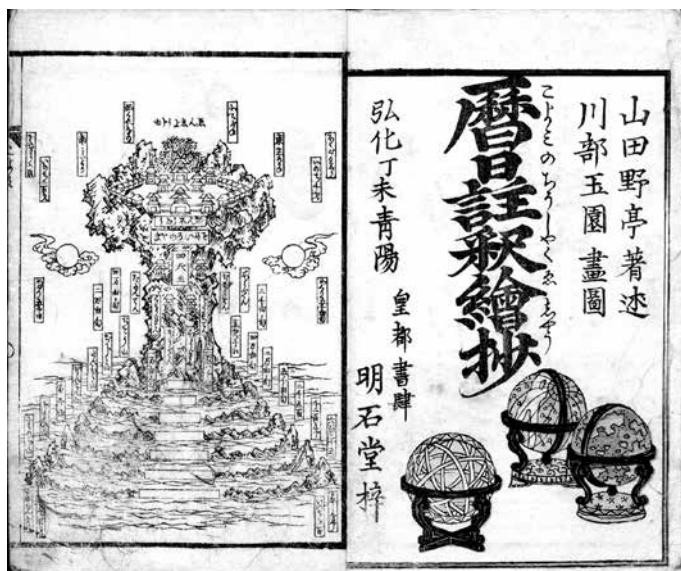
「京都」西村又左衛門板。底本は末尾10年分に元号等を省略するため、延宝元年頃の刊行と思われる。▽「塵劫記」の作者として知られる吉田光由が編纂した、天正4年 (1576) から延宝元年 (1673) までの暦。本書以前に成立していた古暦を訂正した。本文の体裁は、和暦 (上に干支、下に二十八宿) を見出し風に大字で記し、12か月それぞれの、月の大小、朔 (1日) の干支、二十八宿、二十四節気や減没の日付と時刻などを付記、次に、奇数月と偶数月の六十四卦を記す。最下段に納音を示し、左側に各月の月の大小、十干、二十八宿、主要日の干支や二十四節気を記す。

「万民家宝」増補暦之抄大成 (ばんみんかほ ぞくほろのしょうだいせい) 佐藤和泉校。享保元年 (1716) 8月初刊。「大阪」秋田屋徳右衛門板。江戸後期刊。

「大阪」伊予屋善兵衛ほか板。▽陰陽道を始め日本の信仰・習俗の中で生まれた暦日の神々や暦日・方位の吉凶など暦に関する用語を網羅的に集めて解説した書。上巻48項 (全80項) は、歳徳神・八将神などその年の吉方・凶方を司る神々を始め、鬼門、金神や、月建土用の間日 (土を動かす作業など土用中の禁忌が許される例外日)、十二直等の暦用語や暦注、また、各種吉凶日などの解説が中心。下巻も、雑節・吉凶日・暦注など数多く解説するほか、暦に関する種々の問答を載せる。なお、上下巻とも首題に続けて「土御門家校考」と記すのは、作者が中世以来、暦の権威であった同家に仕えていたことを示す。

真暦考 (まにれ) 本居宣長 (鈴屋大人) 作。天明2年 (1782) 9月作。寛政11年 (1799) 7月刊。「京都」銭屋利兵衛ほか板。▽上古の暦と近世の暦の相違などを考察したうえで、中国の暦法を採用することで、かえって種々の支障が生じている現状を指摘し、日本の自然・風土に調和した日本古来の「真暦」に立ち戻るべきことを述べた書。古代における真暦こそが天地自然に即したもので、中国の暦法にならった当代の暦が日本に馴染まない理由を述べ、日本の暦のあるべき姿を示す。江戸後期後印の別本も抄録。

和漢暦原考 (わかんれん) 石井磯岳 (光致・磯岳亭) 作。釈希巽 (律師包山) 校。文政12年 (1829) 6月自序。文政13年8月刊。「江戸」須原屋茂兵衛 (千鐘房) 板。▽日本の暦の起源・歴史、干支の意味などを論じる。神皇から人皇にかけての古代暦について、本邦で初めて外来の暦を採用した推古天皇の以降の変遷を略記し、本朝における7度の改暦を一覧にする。さらに、中国では東周の平王以降、本



朝では推古朝以降に年月に干支を配合するようになった経緯を述べる。また中国の暦変遷を『史記』律書などの諸文献を引いて解説。中国の二十四山方位図の矛盾を指摘し、巻末に自ら考案した方位図を掲げる。

『暦日註釈抄』(ちよくじつしやくしやう) 山田野亭(山田家山子・好華堂・好花堂・得翁齋)作。川部天受(玉園)画。弘化4年(1841)1月刊。『大阪』大文字屋仙蔵ほか板。見返しに「明石堂」とあり。▽『大雑書』等に見える暦占関係の記事を集めて種々の図解を施したもの。口絵に「須弥山図」を掲げ、本文欄に「年徳神の事」「金神の事」「犯土(土いじり)を一切慎む日」などを収録。また、頭書欄に「天象略註(日・月・日蝕・月蝕・三日月・望月、月の和名、月の暈、星、虹蜺、雨、雪、雷)」などを掲げる。原本表紙は色刷。

第79巻【氣象】(収録5点)

『秉燭或問珍』(へいしやくおくもんちん) 鷹見爽鳩(児嶋正長・児嶋不求・爽鳩子)作。宝永7年(1710)1月、三浦義泰(養正齋)序。宝永7年1月自序・刊。文政2年(1819)7月補刻。『大阪』秋田屋太右衛門ほか板。▽天地間の自然現象、また、不可視の現象・怪異現象から呪術・迷信に至る諸現象の原因等について問答体で記述した書。種々の文献や故事に基づいて考証し、妄説・迷信の類を極力排除する姿勢を貫く。6巻2冊に、雷・風・月・虹・光物・谷音・地震・潮・竜宮・狐火・高山煙立つ・鬼門・鬼神・轆轤首・夢・仙人・狐・天狗・瘡・釜鳴・産婦鬼などの事・説を集録する。江戸後期後印本(「大阪」秋田屋太右衛門板)の上巻も抄録した。

『渾天』民雨晴雨便覧(こんてん) 中西敬房(華文軒・如環・東嶺・宇兵衛)作。序。明和4年(1767)4月自序。明和4年7月刊。『大阪』松村九兵衛(敦賀屋・文海堂)板。▽『運気』日用晴雨便覧を「天時不測ノ変災」を逃れないと批判した著者が、地盤(地勢)の十分な把握や、雲色・運気の定時(八節・朔日・四仲等)観測を基本に、占驗(天気占い)も参酌する「観天望氣ノ法」に基づいて記した、日本最初の氣象関連書。占卜の要素を多分に含むため氣象学とは一線を画すが、晴雨計や寒暖計による本格的な氣象観測が幕府天文方で始まる約70年前に緻密な氣象観測を重視した点は先見的である。天体全般や、雲・雨・風などの図説と占法、暦占関連記事、虹蜺・日暈・月暈・地震・流星等の図説・占法、「占六甲風雨法」「占太陽法」「占太陰法」など各種占術・呪術の記事を載せる。

『天文早考』通機図解(てんもんさうこう) 明逸(明一・明月道人・義道・曇寧・解脱隠居)作。序。宝暦9年(1759)10月自序。明和3年(1766)3月刊記。明和4年3月校訂・刊。『大阪』高嶋秀芳蔵板。『大阪』菅田屋伊右衛門売出。▽雲氣(異様な雲や雲状の気)図20種40図(変体図付き)を掲げて、雲氣の形状とその後の氣象予測について述べた書。伊予松山の浄土真宗門光寺七世住職で楠木正成の末裔と自称する著者が、正成が「大賢之資」を以て「蓋世之勲」を建てたのは「其の能く機微に察し、変兆に観るの故」であったが、日頃愛読の「機微変兆之書」から抄録した内容に解説を施したものとす。「柳類」「甚ダソルベキノ氣」で、未申の刻より激しい雷鳴や地震・大雨の前兆であり十分用心すべき雲氣)などを載せる。

『風雨賦国字辯』(ふうふじこくじべん) 中西敬房(華文軒・如環・東嶺・宇兵衛)編・画。安永5年(1776)6月自序。安永6年1月刊。『大阪』松村九兵衛(敦賀屋・文海堂)板。▽中国「太古ノ遺書」である『風雨賦』(明・王鳴鶴編、万暦27年(1599)の邦訳書。『風雨賦』は「天時ノ陰晴及ビ風雷・霜雪ヲ占候スルノ秘訣」を記した書だが、難解な漢文であるため、この本文に仮名書きの詳しい注釈を加えて本書の下巻(坤巻)とし、上巻「図翼」にその図解55図を新たに増補したもの。作者は既に『民雨晴雨便覧』を明和4年(1766)に刊行していたが、同書に未載の「雲氣変形ノ図翼」を本書で補ったもので、この両書を併せ読むことを奨める。下巻は、要語の解釈と各句の大意を示すほか、適宜、関連諸説も引いて丁寧に説明する。

『御免』五穀人豊紀(ごめんごくじんほうき) 嶋津大定(土御門殿門人・東奥桃桑臥仙)作。嘉永4年(1851)11月刊。『奥州福島』臥竜堂文助板(巻末に「最上・米沢・会津卸取次所」と記。嘉永5年11月刊。『江戸』玉光堂善助板。▽嘉永5年(同4年刊)・同6年(同5年刊)の月別天候予測。前者、嘉永5年の場合、まず「年中総考」として一年全体の天候について、当年の納音から農作物の生育予測にも言及する。続いて、各月の干支と月内の風雨など天候予測と農耕に関する諸注意、天変地異の可能性、また、暦注や選日に伴う禁忌等を記す。さらに、巻頭に二十四節氣を6分した六氣別の寒暑・風雨・疾病等の傾向を述べ、また巻末に「生年生日によりて禍を遁れ、悪しきを去り、善となる心がけの事」「疫病即効の薬方」の記事を付す。なお、嘉永6年の予測も同様だが、表記方法に多少の違いがあり、二十四節氣を白抜き文字にして目立たせるなどの工夫も見られる。

第80巻【地方・経済】(収録3点)

『算法入』勸農固本録(さんぽうこほんろく) 万尾時春(万尾六兵衛)作。序。享保10年(1795)3月自序。享保10年4月、平維章(篠崎東海・子文・金吾)序。享保10年9月、謙亭(小宮山昌世・李之進)序。享保10年12月刊。『京都』小川彦九郎板。▽農村行政に携わる者が農民生活や農耕の実情を



(79巻)



(80巻)

把握して適切な農村統治を行うための知識・心得を詳述した書。書名は『書経』の「民は惟邦の本、本固ければ邦寧し」に由来するが、これは著者の基本理念でもある。「役人平日心掛之事」では、役人は朝早く出勤して遅く退くべきこと、郷村統治にはその土地の古例や国風を配慮すべきこと、万事筋目正しく公正かつ公平無私であるべきこと、算法に習熟すべきこと、役人は百姓からの進物等を一切拒否すべきことなどを論ずる。

算法地方指南（だんぱうしほ） 村田恒光（佐十郎・如訥・栢堂）編。長谷川寛（善左衛門）校。天保6年（1835）11月官許。天保7年2月、秋田義一（十七郎）序。天保7年2月刊。「江戸」西宮弥兵衛ほか板。▽地方役人や村役人向けに書かれた農村支配の手引書である「地方書」のうち、特に、検地・年貢・普請等に関する諸計算に比重を置いた算法地方書の一つ。まず地方全般の基礎知識として、日本における国郡里制や農村支配の歴史、地方で用いる度量衡や銭貨の単位、年貢収納高、等級別一反当たり標準収穫量、反取・厘付取（免）の年貢計算法、田畑の本租である物成（取箇・成箇）、毎年の作物で年貢高を決める見取、付加税としての本石斗立・出目米・延米・込米・口永・口米、雑税としての浮役・小物成、検見法全般、稲の主要品種30種とその特色、川除その他普請のあらまし（図解多数）、地方勘定帳における諸計算や、種々の形状をした田畑の面積計算や堤防の体積計算などを載せる。

地方調法記（うけあきき） 烏有逸人作・序。市野節義校。明治3年（1870）5月、烏有逸人序。明治3年5月刊。「東京」相模屋七兵衛（青松軒）板。▽著者の実務経験に基づき農村経営上の基本事項をまとめた書。上巻では、まず優良な農地の条件や、土地の善悪を見極める重要性、また、検見（毛見）と見分、坪刈、地方役人の心構えや百姓に対する指導や理解、郷村の見極め方、蒔田の諸事情など実務上の秘訣や心得を説く。以下同様に、検地・見分の心得、庄屋・百姓の対立と入札による庄屋選任、石盛の起源、田地の甲乙、農業の地域性、田畑の日照を確保するための樹木伐採、田地での麦作、水掛麦（水耕栽培による麦作）、「田分け」の意味、寺社に田地を売るべきでない理由、公事訴訟の心得、川除普請の要点までを述べる。また下巻では、苗代の見積もり、農業の年間諸経費、徳田・損田と田畑の甲乙、諸国独自の年貢定法に対する注意や年貢割付帳等の整備など、後顧の憂いを避ける秘訣などを記す。書袋も収録。

第81巻【旅行・交通（海陸交通）】（収録2点）
増補日本汐路之記（そうほうにほんしよじ） 高田清兵衛（境清兵衛・高田政度・堺屋清兵衛・高田嘉平治）編・序。明和7年10月刊。「大阪」高田清兵衛ほか板。▽多くの船翁と40年以上の親交がある編者が見聞・取材した「海路行程、磯・嶋・瀬戸・灘等の難所、湊の善悪」から「津々浦々の汐がかり（船を停泊させて潮時を待つこと）」までの情報を編集した海路用道中記。行程を拾うと、大坂より江戸より奥州南部東廻り、下之関より津軽青森迄北国廻り、大坂より下之関迄瀬戸内船路、下之関より長崎、肥前松嶋より肥後川尻、枕嶋より京泊迄薩摩路并日向路海上、豊前小倉より薩州鹿兒嶋、肥後熊本より八代、豊後道中府内より熊本、肥前轟木より長崎、肥後熊本より肥前佐賀、佐賀より唐津福岡、小浜より長崎など22航路を載せ、巻末に「風雨を知る事」「略歴（明和7～11年）」「潮の満干」等の記事を付す。

海陸道中行程図鑑（かいりくどうちやうかん） 作者不明（鳥飼醉雅（吉文字屋市兵衛）か）。天保7年（1836）6月刊。「江戸」須原屋茂兵衛（千鐘房）板。▽序文によれば、先行書「本朝行程之書」（鳥飼醉雅（吉文字屋市兵衛）編、寛延4年（1751）刊『海陸行程細見記』か）の増補改訂版という。日本全国の主要街道の位置や路程（宿駅間の里数や道中の情報など）や関連情報を記した道中記で、凡例に「日本の地理丸きを長く画きおぼるゆへに、方角にかゝはらず順道を記す。是によつて其初めに日本全国ををしるし載す。西は朝鮮より金山海、対馬、志岐五島、平戸、長崎等、東は奥州仙台、森岡、弘前、津軽、松前、蝦夷の渡口に至迄其間往來の馬次、道筋、船着等都て大略を記してもの事なし」とある。道中行程図には馬次・船着、名所・山・坂・峠・川、国境、船路、舟渡、城下などを記号で示す。また、余白に「南部津軽名所歌」等の名所和歌や、「奥名所」等の関連情報も記す。「江戸ヨリ大坂迄東海道駄賃附」「大坂ヨリ長崎道中」「道中荷物掛目御定」等の駄賃・問屋関連の情報、「潮汐満干」「旅立の歌」なども付す。

第82巻【災異（地震・救荒）】（収録7点）
饑年要録（きねんようろく） 福沢憲治（彦四郎・六郎兵衛・駒嶺）作。天保7年10月刊。「信州福岡」福沢氏施印。▽信州伊那郡上穂村（現、長野県駒ヶ根市）の豪農で、天保3年以後続いた飢饉に米倉を開放して炊き出しを行い、野草を食料とする研究も進めた福沢憲治が、飢饉の最中に著し自ら施印した救荒書。必要悪の飢饉に対処するには日頃の心掛けが大切なことを論じたうえで、天文14年、寛永19年、延宝3年、天和元年、享保17年、天明3・6年と周期的に飢饉が発生した歴史を振り返りつつ、とりわけ被害が甚大だった天文14年、天明3・6年、天保4年の飢饉については経緯や惨状を詳述する。そして、恒常的な飢饉対策の必要を指摘し、儉約と吝嗇の違い、非常時の備蓄（義倉）の必要性、為政者による儉約・備蓄・防災



(81巻)



(81巻)

の教諭、救荒食物（代用食）のあらましを記す。昭和11年（1936）刊の複製本も抄録。

救荒孫之杖

（神童・枕雲洞・法天・無心庵）天保8年3月刊。「越後笠楨」優字館蔵板。▽古代から天保期にいたる日本の飢饉の歴史や飢饉の惨状、また、飢饉の予兆や越後における飢饉について述べ、さらに、飢饉時の救荒食や、瀕死の人に対する救命法にも言及した絵入りの救荒書。内容は「本朝飢饉運救之事」「飢饉先兆の事」「奥羽飢饉風説の事」「古今人情生計くらべ」「飢饉扶食糧製（実類・根類・嫩葉類・荒地に植べき物・干糧にして長貯へらるる物・海産長貯へらるる物・獣肉・糧物の心懸に蒔植べき物・糝味噌製法・飢饉の時、雑食いたし喰あたりに用る法）」「各種救命法（餓死を救う法、并飢人凍死の救法・縊死を救う法・溺死を救う法ほか）」など。

▽飢饉・災害等の非常時に備え穀物を備蓄する「社倉」の方法と心得を説いた書。社倉法は、朱文公『社倉記』や張文嘉『齊家宝要』で説かれ、山崎闇斎『朱子社倉法』によって日本にも広く紹介された。「夫、善事を行ふ事は、人を救ふより大なるはなし。人を救ふには、飢饉年に過たるはなし」と起筆し、飢饉時に財力のある仁者が力の及ぶ限り救援活動するのは当然だが、仁愛の気持ちはあっても財力が乏しければそれは叶わない、こんな時、古人が考案した社倉法は、「世のさまたげにもならず、国の費にもならずして人を救ふの趣法」であると述べ、各地に「連」を結成し、一人一人が一日銭一文ずつを貯金し、それを集めて米穀を備蓄する積小為大の心掛けを推奨する。

凶荒図録

（小田切春江（忠近・伝之丞・歌月庵喜笑。愛知同好社幹事）編。明治18年（1885）5月刊。「名古屋」愛知同好社（著者）蔵板。▽享保・天明・天保の三大飢饉の惨状や逸話を、『報徳記』『農業全書』『続西遊記』『農諭』『天明年中凶歳日記』『饑年要録』『済急記聞』等に取り材して描いた淡彩刷り絵本。見開きを基本とする挿絵で、「二宮金次郎先生、茄子を喰して凶荒を知る図、付、貝原樂軒翁の諭言」「名古屋藩施行の図」「道路に於て飢人砂を喰ふ図」「九州地方凶荒、橘南谿翁話の図」「西国飢饉、金を持って餓死せし図」「奥州凶歳、飢民羽羽に流落する図」「同兇飢て母の乳房を喰切、并に、親の股に喰付図」「同一村尽く餓死して亡所となる図」「鈴木金右衛門、衣服を売尽して窮民を救ふ図」「義農作兵衛、種麦を枕として餓死する図」「凶歳に塩気を含める筵を煮て食する図」「蟻蜂食を畜へて冬春を凌ぐの図」など18図を掲げ、総振り仮名の平易な解説文を添える。巻末に「救荒草木一覽」と「有毒草木一覽」を付す。

▽文政13年7月2日（1830年8月19日）、申の刻（午後3〜5時）に発生した京都地震を契機に、地震にまつわる妄説を排除し、本朝の地震の歴史や諸文献『類聚国史』『三代実録』『皇帝紀抄』『方丈記』『天文考要』『本朝天文志』『径世衍義』『天文考要』『和漢三才図会』などから地震のメカニズムについて論じた書。また、人々の不安や迷いを解くため、『天経或問』に基づき、今回の京都地震も地球規模からすれば極めて局地的なものであることを「地球図」を用いて解説し、地震には「心（震源地）」があつてそこから四方に揺れが広がることや、各地における大地震の予兆についても縷々紹介するほか、地震を予知した享保年間の盲人四方市の故事や地震の原因に関する考察などを記す。

地震年代記

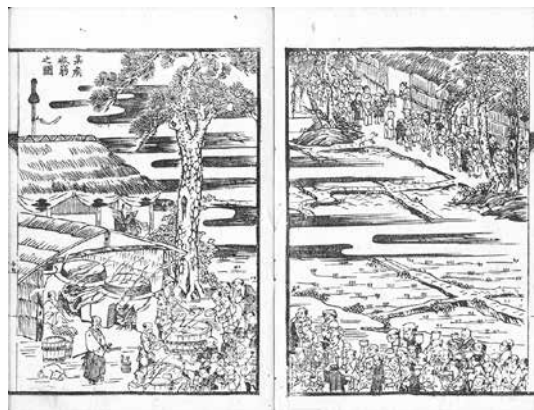
（無名氏編。安政3年頃刊。「大阪」文麗堂（播磨屋利助）板。▽諸文献に基づいて本朝の地震史を総覧したうえで、安政2年10月2日の大地震の詳細を報告した書。『埃囊鈔』の地震動吉凶の占法や仏説に基づく4種の地震に触れ、安政大地震が「帝釈動」であつて決して凶兆ではなく「兎にも角にもいとめでたき世直し」と位置づけ、「上代よりの地震を古今の書籍より鈔略・取詮して、今度（安政大地震）のいくらも勝る地震数十度ありしかど、世の衰弊するにもあらず、弥栄えにさかえて天地と共に窮りなき我輩原の中国の泰平万々歳たるよしを人々に知らせ参らせん」と出版の意図を披瀝する。前半部は古代からの地震の記録を記載し、後半部には、安政大地震の江戸府内の被害状況などを18地域別に、また江戸を起点とする街道筋近郷の罹災状況を、「潰家一万四千二百四十一軒ト千三百三棟、潰土蔵千六百四十九ヶ所」のように記載する。「須佐之男命が国をゆるする図」「東大寺盧舎那仏罹災図」「伏見大地震図」「江戸地震出火一覽」「安政大地震後の御救小屋風景」など6葉の口絵・挿絵を収める。

▽表紙とも5丁の小冊子で、安政2年10月2日の大地震の模様やその被害をルポルタージュ風に報告したもの。江戸府内各地の惨状を次々列記、周辺部や街道筋の罹災状況にも言及し、今回の被害が明暦の大火を超えるもので死者も数知れず、荷車や船で死体が寺院へ運ばれる有様は見るに堪えないのだが、翌日には鎮火し、時折余震があつても特別な事はないと述べた後で、「町数五千三百七十余崩」「御屋敷二千五百六十余軒損ず」「寺院堂社三万九千六百三十ヶ所」「土蔵の数五億八万九千七百八十六ヶ所」と罹災規模を具体的に示す一方、「軽き者へはそれぞれ御手当・御救米被下置、四民安堵に帰し、鼓腹して御仁徳あふぎ奉るは、実に目度事どもなり」と為政者の救恤を讃えて、「かゝる凶変のうちにかくまで調集なすは、遠国・他邦の親族へ告知らしめて安堵

の教諭、救荒食物（代用食）のあらましを記す。昭和11年（1936）刊の複製本も抄録。



(82巻)



(82巻)

* 図版は収録資料の一部です。詳細はホームページの配本案内をご覧ください。

ならしめんことを思ふの老婆心なり」と記す。

第83巻【佛教（般若心経）】（収録6点）

般若心経抄（はんぎんじょう）玉川雲起（一真）作。天明2年5月初刊。「大阪」秋田屋太右衛門ほか板。▽般若心経の絵入り注釈書。正式名称を「摩訶般若」「波羅蜜多」「心経」の三つに分け、例えば「摩訶般若」とは「大智慧」のことで人々に本来備わったものだが、小智にさえぎられて大智慧を見ることができないと論じて大智・小智などを順々に読み解くように、それぞれの意味を詳しく解説。「観自在菩薩：」以下の般若心経本文を一句ないし数句からなる二五段に分けて施注するが、特に「照見五蘊皆空、度一切苦厄」「不生不滅、不垢不淨、不増不減」「乃至、無老死、亦無老死尽」の三カ所は頁を費やして詳しく解説。本文中に挿絵4葉（盗賊・往来の人々・酒宴遊興・恒河）を挿入。

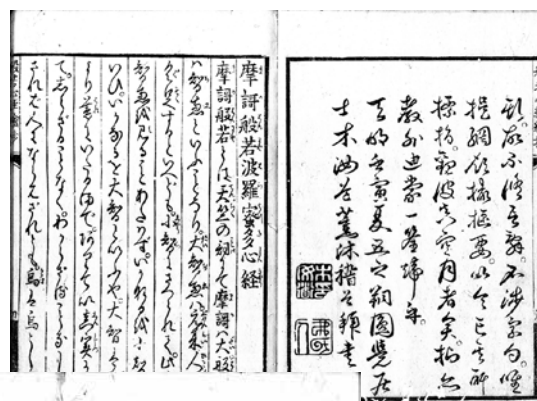
般若心経和解（はんぎんじょうかい）作者不明。天明2年（1812）4月初刊。「京都」普屋儀兵衛ほか板。▽般若心経の題号と、本文各句の語注や文意を詳しく解説した注釈書。「文字学者の為にせず。教相（仏教諸宗の教義理論）の名目（呼称）も少なし。簡にして要なり。言文なさを離して惑なし」（序）。本文3分の1を費やして「摩訶般若波羅蜜多心経」を注し、題号の解説に重点を置くのが特徴。「心経」とは「唯自の心を説いた」とのもので、これは心経に限らず「一切の経論・祖録、皆自心を説いたるものなり」と喝破。「照見五蘊皆空、度一切苦厄」と「無苦・集・滅・道。無智、亦無得」の二段の注釈が長文であり、前掲「般若心経絵抄」と比重の置き方に相違がある。注釈は総じて口語調。序文を書いた知真庵は、江戸中期、天明頃の僧侶（京都清閑寺住職）で、手島堵庵に師事した心学者。

般若心経鈔図会（はんぎんじょうしやうぐい）辻本基定（源基定）編。天保15年（1844）初刊。「京都」堺屋仁兵衛（尚書堂）板。▽絵入り注釈書。「摩訶般若波羅蜜多心経」の題号を詳しく説き、「般若」は智慧を意味するが、これは世間で言う「分別・才覚」などの「小智」とは別次元の「大智」であり、「心経」とは「般若の心」、そして、仏がこの経を説いたのは「本覚の智慧をもつて一切の衆生をして妄心・もふねん（妄念）を除き正しめて生死大海のこの岸をわかれて不生不滅のねはん（涅槃）の彼岸にいたらしめて、衆生をして本心・本性を見せしめんがためなり」と述べ、続けて「此法はうけてたもてる玉なれば、永きよてらす宝成けり」以下14首の和歌（道歌）を掲げるように、注釈文の随所に道歌を数多く列挙するのが特徴。「釈尊と弟子」「白象に乗る遊女江口（西行や一休が遊女とやりとりする問答歌を掲げる）」「花見」など挿絵4葉を載せる。

般若心経和訓図会（はんぎんじょうわくしんぐい）山田野亭（山田案山子・好華（花）堂・大和屋主蔵）作。松川半山（翠栄堂）画。天保15年（1844）3月初刊。「大阪」藤屋善七・秋田屋太右衛門板。▽幕末から明治初年にかけて往来物や通俗教訓書を多数手掛けた大坂の作家と絵師、すなわち山田野亭と松川半山による絵入り注釈書。「此書は、般若心経を真説・訓読両点とも平仮名付にし、且また、一字一句ごとに委しく註解し、悉く絵図を加へし珍書なり。夫、この心経は般若六百巻の中より肝要の文を抜萃せし妙経にて、誦誦する人は福を増し、禍をはらひ、心経功力の広大なることをしりやすき書物、これにまさる書なし」（巻末広告）。上下2巻。注釈には、平易かつ丁寧な語注・通釈のほか、しばしば故事を添えるため、「深草の少将百夜通い」や「巴峽の猿（母猿断腸の故事）」など多くの挿絵（15図）を施すのが特徴。下巻末尾に「秘密般若略解」と題して「羯諦羯諦：」以下17字の真言の大意を載せ、梵字の表記（神呪梵字）も示す。

二時食作法文諺註余説・般若心経略諺註（にじじきしょくさくぽんぶんぎやうしゆざいよふしやう）十阿（義聞）作。嘉永元年（1848）以前刊。刊行者不明。▽前半に「摩訶般若波羅蜜多心経略諺註」、後半に「食時作法文諺註余説」を収録した仏書。前半は般若心経の簡潔・平易な注釈書。古来の訳本が11種あり、中でも鳩摩羅什訳（『摩訶般若波羅蜜多心経』）と玄奘三蔵訳（『般若波羅蜜多心経』）の2訳が流布するが、本書が玄奘訳に基づくとする。注釈文の長さは各段とも1・2頁ではほぼ均等だが、「舍利子。是諸法空相」の段は5頁超で特に詳しい。しばしば概念を図式化するのが特長（小乗七十五法図、大乘百法図、五蘊之図、四諦図など）。後半「食時作法文諺註余説」は、律家（律宗）における食作法（食事の際の宗教的儀式・作法）を問答形式で解説したもの。

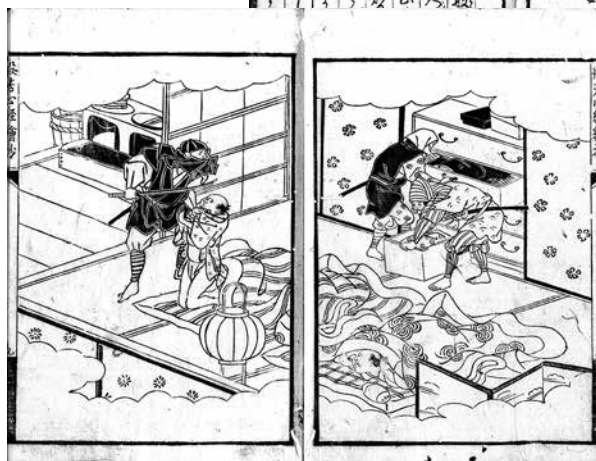
般若心経絵入講釈（はんぎんじょうえいりくわうしやく）近沢幸山（桃堂）編注。一光斎芳盛（歌川芳盛・三木光斎）画。万延元年（1860）4月刊。「江戸」若林喜兵衛（玉養堂）板。▽前掲の山田野亭作「般若心経和訓図会」の注釈と挿絵を模倣して編んだ絵入り注釈書。上段頭書にしばしば「和訓図会」と同様の挿絵37葉と詞書、また、般若心経の書き下し文を載せ、下段本文欄には「和訓図会」と同じ段落で、ほぼ同文か一部割愛または改編した注釈文を割注形式で載せる（基本的にこの体裁は經典余師にならったもの）。例えば「深草少将と小野小町」の故事を「平清盛と常盤御前」に差し替えたり、越前国朝倉郷の逸話を下総国葛飾郡の「八幡知らずの森」の話に改編してある。



(83巻)



(83巻)



第84巻【祭祀（葬祭）】（収録8点）

非火葬論（ひくわんそん） 安井真祐（帰正庵）作。享保2年（1717）9月刊。「江戸」戸蔵屋喜兵衛板。▽もと京都の僧侶で、後に還俗帰儒した著者が、父母を火葬した己の後悔を他人に味わわせないために、火葬の起源、火葬の非道と残酷さ、火葬を広めた仏教の矛盾や問題点を指摘した仮名書きの書。益軒から「世教に補ひあること大なり」と評価されたが脱稿から30余年後に刊行された。火葬が「不孝第一の所為」で「人情自然の彝（人が常）に守るべき道」に背く行為であること、「父母を愛しみ敬まふ」のは「良知良能の天然」であり、父母の遺体を大切にするのは「愛敬の心」にほかならないと説く。そもそも火葬は古代中国の極刑であり、火葬で穢れた煙を神国の空にたなびかせるのは最も禁忌すべきものと非難。また「愛敬の本心」や「人情自然の彝」を妄想とみなし、未来応報説や念仏宗の悪人正機説で社会秩序を維持せんとする仏教の教えは、火葬同様に有害無益と論断する。

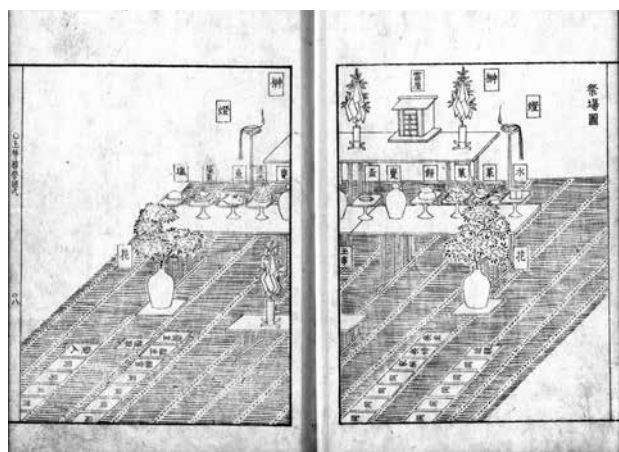
日本養子説・非火葬論（にほんようしせ）は跡部良顕（光海・良賢）作。「非火葬論」は安井真祐（帰正庵）作。「日本養子説」は享保7年（1722）10月作。「非火葬論」は安政3年（1850）8月刊。安中藩板。▽「日本養子説」は、皇統における養子の事例を示して養子の必要とその道理を論じた書。『日本書紀』神代卷（上）の天照大神の勅「其の物根を原めれば、則ち八坂瓊之五百箇御統は是、吾が物也。故に彼の五男神は悉く是れ吾が見なり。乃ち子を取りて養しき」を引いて、これを「我国養子の始」とし、以下、成務天皇が日本武尊の子を養子にして譲位したことなど皇統における養子の例をいくつか示し、末代においては「氣化も薄く、上下男女を生ずる事も古に及ばざれば、子なきものは養子の義なくては叶はぬこと」と述べて養子の必要性を強調し、その心得を述べる。「非火葬論」は前掲の享保2年板と内容だが、甘雨亭叢書本では、送り仮名・振り仮名を省略・割愛したり天皇名の前を欠字にするなどの改編が見られるほか、甘雨亭主人の跋（5行）を新たに加えてある。

葬事略記（りやうじ） 角田忠行（由三郎・伊吹舎・墨繩）作。江戸末期初刊。刊行者不明。▽老親を持つ者の心構えや神葬祭における準備や儀式全般を述べた葬祭書。危篤の際に、家や自身についての心得や遺言などを全て書き留めるべきこと、親が死去したらすぐに神柩を封じ、被（槨、槨）で棺を作ること、神衣（神道の死に装束）や副葬品、納棺、祭壇等についてなどを記す。また、祭主（喪主）が告げる故人「一世の功業」の文例を掲げたり、「葬の後、五十日も過なば、おごそかに墓碑を立てるぞ、人の子たるの道にはありける」と説く。親の肖像については「或は歌にても詩にても得意のものを書せ」、あるいは、棺用材の被について「此木なくば、松の木など用ふべし。檜杉の類用ふべからず」など、本文の随所に割注・補注を施す。

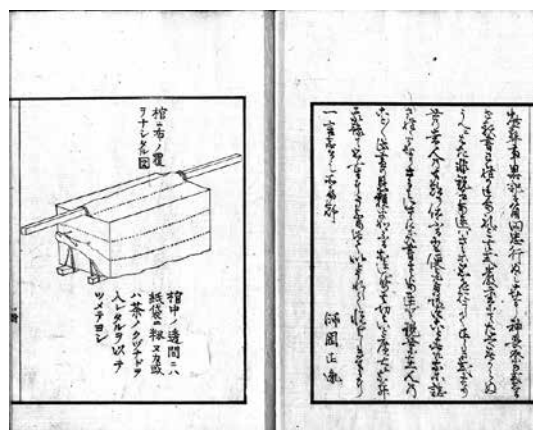
喪儀略（りやうぎ） 古川躬行（汲古堂）作。慶応元年（1865）7月刊。刊行者不明。▽冒頭の「葬儀略」で葬儀のあらましを時系列的に詳しく説明し、「葬具」で葬祭用具の説明と図解を掲げ、さらに「槨式」で祭文・木牌・墓碑・喪中心得等を補足した仮名書きの神道葬祭書。病が重く危篤になったら、内外を静かにし、遺言があればこれを書き留め、予め霊璽を造っておき、臨終間際には家の主や葬礼関係者は衣服を改め、手洗い・口漱ぎで身を清め、霊璽を机上に置き、筆と硯を携えて病床へ行き、霊璽に病人の姓名を墨書する。その際、病人に向かって彼の霊を霊璽に遷す旨を密かに告げる（その文言も例示）……という具合に順序立てて葬祭の手順を示す。さらに、霊璽の奉安や祭壇の供え物や飾り付け、臨終後の諸準備、遺体の身支度と安置、また、これらに使用した道具や汚水等の処理についても言及し、さらに、二十四時（埋葬前に遺体を安置する期間で二日間）以降の儀式、出棺から埋葬後までの作法や事後処理までを記す。「喪儀略」に多くの加筆・修正を加えて、巻末に「触穢」「服仮」の附録記事を増補した増訂版が後掲『増訂喪儀略』である。

増訂喪儀略（ぞうていりやうぎ） 古川躬行（汲古堂）作。明治4年刊（増訂版）。古川家蔵板。「大阪」鹿田清七ほか製本。▽前掲『喪儀略』に多くの加筆・修正を加えて、巻末に附録記事等を増補した増訂版。総じて増訂版では、『喪儀略』よりも本文の文字を小さめに記して記述量を増やした箇所が目立つ。例えば、「沐浴」では「或は手巾もて頭の髪より初めて、能々身体を拭ひ、下体に汚穢あらば、腰より已下を洗淨はんもあしからじ」という割注を新たに加える。巻末附録は『喪儀略』に未収録の記事で、人の死穢や無服の殯（七歳以下の死には喪に服さないこと）を始め、弔喪・産穢・月経等の穢れの心得である「触穢」と、近親者の死去に際しての服喪の作法などを記した「服仮」の記事である。

庶人喪儀式（しよにんさうぎしき） 古川躬行（汲古堂）作。明治5年（1870）冬刊。著者（汲古堂）蔵板。「大阪」鹿田静七ほか売出。▽庶民向けに神葬の基本を記した平易な葬祭書。神葬が「我国ノ風儀ニテ葬祭ヲ行」ことであり、日本の国風はもと「諸事煩雑カラズ質直ニ簡易カリシ」ものであったが、「儒仏ノ教起テ華飾ヲノミ尚ブ事トハ成タリ」と現状を憂え、「葬祭モ古昔に復シテ簡便ニ敦厚ク行ベキ事第一ノ心得ナリ」と日本古来の神葬に基づくべきことを強調し、「恣ニ肉ヲ食ヒ、酒ヲ飲、無頼ナルヲ神葬ト思フ事勿レ」と明言し、近親者はもちろん人の死去に際して「哀情」がないのは人の道ではないと説く。これ以下の本文は概ね「喪儀略」の骨子。挿絵4丁分（木標・諱詞・神・結灯台、霊璽・机、臥棺・蓋・坐棺、霊祭



(84巻)



(84巻)

図、墓碑など）を掲げる。

上等葬祭図式

▽主に貴人向けの神葬を簡条書きに記し、多くの図解を交えて解説した葬祭書。「官位高キ人等ノ葬祭ニ係テ数度執擬ヒタル記録等ヲ本種トシテ目安ク図式ニ撰定」したとし、「歛具及祭具ノ品物、員数・寸法ニ至ル迄、万事際ヤカニ記載スルト雖モ、総テ失費ニ関係スル事物ハ、其分限ニ応テ増補・節略スルコト喪主ノ意ニ任スベシ」と述べ、本書で示したものが一つの目安であり、喪主の事情に即して適宜判断すべきと断る。葬祭は神職等に全面的に任せよと説いた後、葬祭の手順、神官ならびに教導職等の役割や招魂祭・葬祭の基本的な心得を示し、招魂祭・地鎮祭・入棺・発葬祭・葬所祭・墓所・見滌禊祓・葬後霊祭・追祭について、儀式の段取りや必要な準備について順々に説明し、適宜、葬祭具や祭場風景などの図解を多く掲げる。

葬儀心得大意

▽新田邦光（竹沢寛三郎）作。明治11年3月刊。「東京」山田亀一郎板。▽神道修成派の門人向けに編まれ出版された、表紙とも全10丁の簡易な葬儀心得書。同派の教祖、新田邦光が慶応年間に門人に示した葬儀心得の聞書を後に校訂・上梓した。邦光の心得は全14項から成り、①生死は表裏であり、吉凶循環が当然の理である、②生は当世への来臨、死は幽界への帰去であり、懇篤を尽くして死者を送るべきで、葬儀には己の真情を竭せ、③仏式の葬祭には神代以来の伝統も多く、仏葬を神葬に改めることは困難ではない、④私が説く神道修成派の法に従って葬儀を行えば死者の霊は神となる、⑤墓には木を植えよ、世間の火葬は野蛮だから決して用いるな、⑥眼前の神道の葬法を無視して外国の葬法を用いるな、⑦祝詞の奏上が望ましいが、死者の行状を懇切に記した俗文でもよい、など。末尾の増補は、天皇と同様に皇国民が全て神葬にすべきことや、神道教導職が葬儀に際して金品を得てはならないことなどを説く。

第85巻【漢学（語録）】（収録1点）

言志四録

（言志録・言志後録・言志晚録・言志墓録）（収録1点）

志録」文政13年8月初刊。「江戸」須原屋佐助板。「江戸」和泉屋吉兵衛（名山閣）板。【後録】天保8年初刊。「江戸」和泉屋吉兵衛板。【墓録】嘉永3年（1850）9月初刊。「江戸」有平爾斎（渡辺氏力）板。【言志四録】は一斎が晩年の40余年にわたって書いた語録（総233条）で「言志録」「言志後録」「言志墓録」4冊の総称。内容は自身の志に資する事柄を、自戒の念も込めて折々書き記した漢文体随筆。わが国語録中の白眉と言われる。主な内容は、「言志録」は、「運命は既に定まる」から「数理の秘」までの運命論・宿命論で、天意・天道・窮理・天命、本然の性・心、学問・学者、寛容、修己治人、君臣・為政者・重臣、生死・靈魂、欲望、教育など。「後録」は、「斃れて後已む」から「古人を心友とする」までの儒学を学ぶ心得で、養生・身体、儒学と実践・言行一致、君子・小人、書物、子弟教育・塾など。「晚録」は、「学問と政治」から「真我脱・真実の自己」までで、儒学・日本の宋学、講義・学問、武士・兵法、治世・乱世、家庭倫理、老人、医者・養生など。「墓録」は、「学問の道」から「臨終の心得」までで、学問、立志、心の靈性、感応、処世法、毀誉、君主・官吏、訴訟、老人心得・養生法、臨終心得など。

第86巻【医学・本草】（収録1点）

広恵濟急方

（多紀元徳（丹波元恵・安元・藍溪・永寿院）編。多紀元簡（安長・桂山・櫟窓）校。植田文敬（通史）書。寛政2年（1790）8月刊。「江戸」須原屋嘉助ほか板。▽仮名書きの平易な記述と豊富な図解により、適切かつ実用的な処方や治療法をまとめた民間向けの救急医療辞典。十代將軍徳川家治の要請で編纂された。上巻は「卒倒之類」中風・脱腸・交接昏迷・中気・痰厥など19項。中巻は「卒暴諸証」吐血・齒衄・舌衄・諸失血眩暈など22項と「外傷之類」金創・舌断・擦壊など15項。下巻は「横死之類」餓死・縊死・溺死など6項、「諸物入九竅」誤吞銅鉄物・諸物哽咽・卒食噎など7項、ほかに「中毒之類（諸物中毒）」、「婦人（産前）急証」、「臨産急証」、「産後急証」、「小児急証」を収める。

第87巻【茶道】（収録5点）

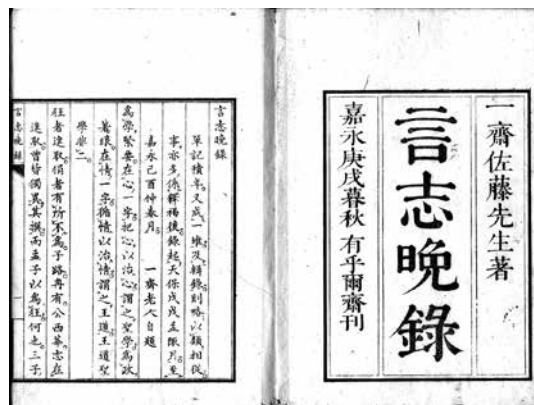
茶道早合点

（珍阿（珍阿弥・洛北隠士）作・序。萩箸叟跋。明和8年（1771）9月初刊。「大阪」植田伊兵衛ほか板。▽初心者のために茶道の基礎知識と基本的作法を豊富な図解で論じた入門書。茶道を極めるための書ではなく、茶を楽しむための最低限の知識（露地・茶室・茶器および製作者等）と心得をまとめたものとする。上巻で「茶人系図」「廬路の図」「茶室」「香盒」「金」等の項目に分けて基本的事項を解説、下巻で茶器類のあらましを図解した後、「茶の湯の大概」と題して基本的な作法と心得を教える。

煎茶早指南（せんちゃはやしなん）（瓦礫舎主人（朴巖・靈岳院祖淳）述。柳下亭嵐翠（宗一・街頭道者）編・画。享和2年（1802）1月刊。「尾張」永樂屋東



(86巻)



(85巻)

四郎（東壁堂）板。▽近年（享和頃）流行する煎茶の入門書として著した煎茶指南書。既に流布していた上田秋成『清風瑣言』（寛政6年刊）、大枝流芳『煎茶仕用集（青湾茶話）』（宝暦6年刊）、巽斎子作『煎茶決』（未詳）等の煎茶指南書は「初心の人の一見に解しがたし」と述べる。上巻は涼炉・丸ころろ・風炉・炉囲・瓢製茶焙を始めたとする茶道具や茶器を詳しく図解する。下巻では「茶を貯ふ事」「湯かげんの事」「茶を煎じて熟味をうかごふ事」「花香茶の事」などについて簡潔に述べ、巻末「附言」で、茶道の肝要である「和敬静寂」の四意、茶の効能、『茶経』『茶経詳説』を始め、和漢の茶人や茶書、日本の銘茶や茶器の産地などについて補足する。

茶湯早指南（はやしなん）月斎峨眉丸（沼田峨眉丸・峨眉山）作・画・序。文化6年（1809）4月刊。「江戸」西村屋与八ほか板。▽豊富な図解に丁寧な解説を添えた茶道入門書。客の心得（客意）と主人の心得（主意）を上下二段に分け、前者に「返書認様の事」「風炉の茶湯事」「菓子茶湯事」「跡見の茶湯事」、後者に「五時之約束」「口切道具組定」「当日茶湯式」「炭手前の事」などの項目を概ね時系列的に記述するほか、本文中に「客意の図形」や、手元の細かい所作を図解した「手の図」「女立前之図形」などの図を添えるなど要点を詳しく解説するのが特徴。

このめの説（このめ）前田夏蔭（前田健助・菅原夏蔭・鶯園）作・跋。文政12年（1830）10月刊。「宇治」上林盛一蔵板。「江戸」岡村庄助（尚友堂）製本。▽日本における茶の起源や歴史、また、茶事や茶道の沿革などを考証的に記述した書。『類聚国史』『日本紀略』『元亨釈書』『凌雲集』『文華秀麗集』『西宮記』『和名類聚抄』『経国集』『喫茶養生記』『年中行事歌合』『太平記』『喫茶往来』『異制庭訓往来』など多くの文献を引用し典拠を示す。

喜撰往来大全（きせんわらいだいてん）荒堀庄之助（一四歳）書。安政3年（1856）8月書。▽製茶に関する現存唯一の往来物。茶栽培（下準備、肥料等）から生葉の摘採、加工（蒸熱、乾燥、袋詰等）、保存法、茶の取引に必要な斤目や相場・通貨の単位、また、日雇いの摘み子に対する褒賞、製茶業に必要な諸帳簿等に関する要語と心得を記す。製茶業者子弟用に編まれた往来物か。

第88巻【天文】（収録1点）

《運氣曆術》天文図解（てんもんしゅかい）井口常範編・序。梅華堂義雪図解。元禄2年（1699）6月初刊。「大阪」河内屋源七郎ほか板。▽天文・暦学の概要を平易に解説した最初の書で全五巻。自序によれば、一々三巻は天体や「七政（七曜星）の行度（運行）」に関する論。四巻は算術を用いない「推歩（天体の運行推測）」や「運氣論（古代中国の天文学思想）」の概要や「天文の旧説」に対する批評。五巻は二十八宿や七政の違いや列宿（星座）や五星の形などで、以上は、「幼学の士」が実見し難い道理を悟り、知り難い知識を得る「捷徑（近道）」であるとする。

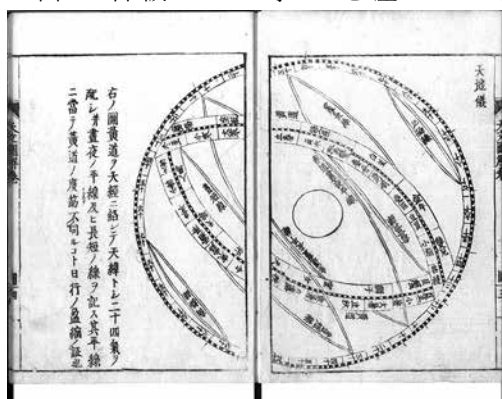
第89巻【医学・看護】（収録6点）

古方便覧（こへんらん）六角重任（六角主計・毅夫）作・書。吉益東洞（為則）校・序。天明2年（1788）9月初刊。「大阪」高橋平助ほか板。▽『傷寒論』や『金匱要略』の薬方を基本にしながらも、日本人に適した処方や実践的な治療を目指した古方派を代表する処方集。上巻は「桂枝湯」から「土瓜根散」までの97方、下巻は「桃核承氣湯」から「蛇牀（床）子散」までの90方を系統的に並べ、薬方毎の調合法・効能・服用上の諸注意などを記す。下巻末に種々の腹部の状態を図示した「附録腹候図」を掲げる。作者は、江戸中・後期の漢方医学に多大な影響を及ぼした吉益東洞の弟子。

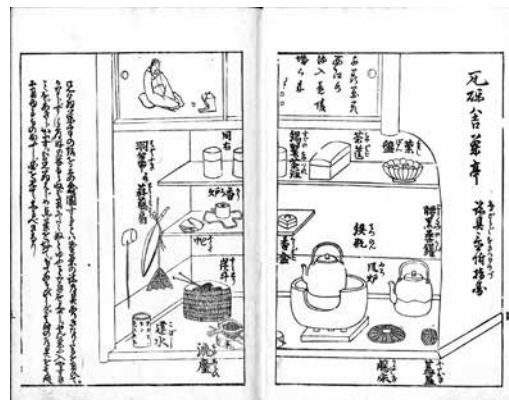
賜民薬方（くしみんやくほう）阿部正興（正右衛門・奥州須加川住）編・序・跋。文化8年（1811）1月自序・刊。「奥州須加川」著者蔵板（施本）。「江戸」西村屋与八製本。▽「大人小児急病、或は急難を救ひ治する秘方」を述べた民間療法の小冊子。大人から子供までが急病・急難に直面した時の基本的な救急法を列挙する。鼠や猫による咬傷、銭の喉詰、眼病、食あたり、食滞（食もたれ）、火傷、刺し傷、漆かぶれ、魚骨（咽頭）異物、蛇による咬傷、水難事故、気絶、捻挫、発熱、小児五疳（疳の虫）、寸白（寄生虫）、鼻血、縊死未遂、一酸化炭素中毒までの対処法を記す。

看病手引歌（てんびんしゅいか）霊応（尾張秋白山）作。文政10年（1827）1月刊。刊行者不明（施印）。*別に「名古屋」白山本地堂板がある。▽表紙とも七丁の小冊子。七五調の和讃形式で、看病の意義や具体的な看病の方法や諸注意を述べた教訓書。見返しに「八福田」（敬い仕える）と福徳が得られる仏・聖人・和尚・閼梨（阿闍梨）・僧・父・母・病人の八つを掲げる。臨終に際して病者に念仏を勧めるなど、臨終作法書の面も持つ。

精養要略（せいようやく）元玄堂編・序。天保10年（1839）刊。刊行者不明。▽編者の師である桜井祐之に学んだ「医道之真理」を「治療と養生の道」と「病人看病人の心得」の二章に分けて説いた小冊子。例えば鳥・獸・虫などは本能的に「其薬を知り、喰ふて病を癒す」が、これが天地自然であり、いかに病名が増えようと本来「万病一毒」であり、病毒を去るには「汗・吐・下」（発汗・嘔吐・下痢）の三方以外にないとする。



(88巻)



(87巻)

(89巻)

* 図版は収録資料の一部です。詳細はホームページの配本案内をご覧ください。

とし玉(託) 佐藤鶴城(藤原方定・民之助・神符満) 作・序。嘉永5年(1823) 1月刊。「江戸」著者蔵板。「大阪」河内屋喜兵衛ほか売出。▽医師のいない田舎者でも薬を待たず、急病にも自ら対処して辛い境遇に陥ることなく、天下の人々が共に健やかに新年を迎えるべく、養生や長寿の秘訣をささやかな一枚刷りとして毎年配布してきたものを合綴した小冊子。

〔長生法附録〕救急法(くきゅうせいはうほう) 石黒忠憲(恒太郎) 作。明治6年(1873) 頃刊。刊行者不明。▽「救病療法并貯薬用法」〔眩暈・卒倒〕「消化不良并に飲留」〔下利(痢)〕「便秘」〔嘔吐〕「腹痛」〔霍乱〕「中食」〔感冒〕「瘧病」〔蛔蟲〕「截傷」〔打撲〕「火傷」〔咬傷〕「重病中の失神」について記した小冊子。日本の医道が大貴己命と少名彦名命の二柱の神に始まることや、文明開化後の医学校の制度と医者現状に触れ、このような日本の医療の現状に多少の関心を持ちつつ、「急場用心の薬」を家庭に備え付けるべきことなどを助言したうえで、日頃の備えで急場しのぎが可能な、前述各項の救急法を簡潔明瞭に説く。

第90巻【辞書】(収録1点)

日本釈名(にほんしやくめい) 貝原篤信(損軒・益軒) 編・序。松下見林(慶撰・西峯・秀明) 序。元禄13年(1700) 初刊。「京都」茨城多左衛門(柳枝軒) 板。▽後漢末の劉熙が編纂した『釈名』にならって、和語を「天象」「時節」「地理」「宮室」「地名」「以上五門、上巻」、「水火土石金玉」「人品」「形体」「人事」「鳥」「獸」「蟲」「魚」「介」(以上九門、中巻)、「米穀」「草」「木」「飲食」「衣服」「文具」「武具」「雜器」「虚字」(以上九門、下巻)の二三門に分け、「神代直指抄」「釈名」「仙覚抄」「万葉集」注釈書』等を参酌しながら約一一〇〇語の語源を解説した字書。語源解釈上の八原則、すなわち、「自語(上古の時、自然に云出せる語)」「転語(五音相通によりて名づけし語)」「略語(ことばを略する語)」「借語(他の名とことばをかり、其まゝ用ひて名づけたる語)」「義語(合語。義理を以て名づけたる語)」「反語(かな返し。「はたおり」を「服部」とする類)」「子語(母字より生ずる詞)」「音語(字音・唐音・梵語を用いて和語にする類)」を設定し、諸説が考えられる場合には最も適切な説を冒頭に掲げる。また、上代以来の和語を字音で解釈したり、近代の俗語をもって上古の言葉解釈することなどを排除するほか、子語をもって母語を解くのではなく母語を用いて子語を解くべきことや、難解な語を疑わしい語でみだりに解くべきでないことなど種々の注意を喚起する。

第91巻【商業】(収録2点)

町人考見録(ちやうじんこうけんろく) 三井高房(三郎助・八郎右衛門・宗清) 作。享保頃(1716-1736) 作。▽三井総本家三代の高房が、二代高平(宗竺) が見聞した、主に京都町人の没落事例をまとめたもの。計50話と跋文中に5例を載せるが、大半は「大名貸し」「贅沢」「才覚不足」等による失敗事例で、没落商人を他山の石とする商人教訓書と言える。わずかながら成功した模範的商人、河村随見(瑞賢)、鴻池善右衛門等の事例も交える。「町人の盛衰は其主の守りにあり。よつて、昔よりの町人の家を失ふ趣を親に尋ねてしるし置、家門の輩にも見せ度旨をすゝむ。」(跋)

諸国道中人鑑(しよこくどうちやうじんかん) 竹野(竹楚) 半兵衛・壺井円水編。歌川国景(一英斎・英斎・一桜斎) 画。文政10年(1827) 刊。「江戸」花屋久二(次) 郎(星運堂) 板。▽中山道(板橋・川越・松山・小川・寄居・藤岡・富岡・下仁田・初鳥屋等) の、道中宿駅ごとの宿屋や名物・名産品の店舗情報(業種業態・販売品目、商標、屋号、住所等) を紹介した名鑑。所々に店舗外観や周辺の風景図なども掲げる。

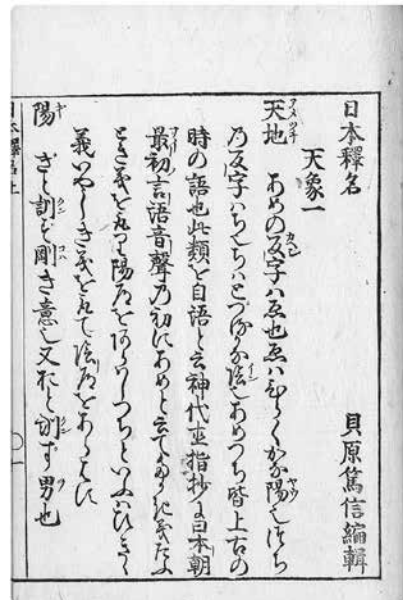
「国々の諸問屋および名家の工商、或は所の名産、当時手びろく仕入れ、値段・格好よろしき店、亦是累代験功ある売薬ならびに諸病の妙やく・料理茶屋・水茶屋、名高き旅籠屋にいたるまで委細にしるし。」(序)

第92巻【商業】(収録2点)

家業道德論(かぎようとうり) 河田正矩(孤松・荷秉庵) 作。元文3年(1738) 作。「大阪」天王寺屋正兵衛ほか板。▽土農工商それぞれに職務に応じた徳目や求められる能力が異なるという立場から説かれた町人向け通俗教訓書。収録は25項。「天地の問理は一つにあらざる之辨」「家業を専とするは儒仏の極意なる之辨」「無能は有能に勝りて其身に益ある之辨」「其職によりて五常にも本末の序ある之辨」「異端外道とは家職の外を務るを謂之辨」「卜筮に未来は定難き之辨」「孟子の性を善といふは方便の説なる辨」「異国の風俗は悉く我朝には合ざる之辨」「教化によりて気質は変ぜざる之辨」「家業道德の利益余教に超過之辨」「極楽浄土に往生無益之辨」等。



(91巻)



(90巻)



(92巻)

商人生業鑑（わいきんぎょう） 岩垣光定作・跋。守岡光信画。宝暦7年（1757）序。「京都」菱屋孫兵衛板。▽絵入りの商人教訓書。内容は、商人の職分と後継者の育成、倭約と吝嗇の違い、安きに居て危うきを忘れぬ事、ある葉種問屋の「万日開關帳」の話とその商売の趣き、買い置き、命ほど大切なものはない事、わが子を出家させる心得、利方は良くて世上の氣に叶わぬ事、春夏の入用物は冬から心懸け用意する事、一紙も粗末にせぬ事、人は賢いようで愚かな事、人の器量を見極める事、親しきに礼儀ある事、金銀の出入り勘定は主人が念を入れるべき事、幼時から召し使う奉公人に情けをかける事など。

■第93巻【書道】（収録2点）

臨池求源鈔（りんちきゅう） 鈴木正真（鈴木周水・悦斎・臨池堂・向若子・儀右衛門・七郎右衛門）作・書。元禄10年（1693）作。「京都力」刊行者不明。▽御家流の能書の筆跡を集めて臨書した筆道書。（上巻）伏見院・後伏見院、青蓮院宮尊円親王・同導道親王・同尊応准后ほか12人の詩歌と、尊円親王筆「御賀往来」。（中巻）文字・書道の起源・沿革や筆法の基本を述べた「論字義」、当世筆法の師伝や師伝の学び方、上代の筆跡を模範とすべきこと、真行草の書法、御家流の筆術等について述べた「論楷法」。（下巻）は種々の筆法で、詩歌二法之事、横堅文字之事、四声文字之事、掲神前画馬書付事、絹布二物書事、進献宮書付之事、書物外題之事、短冊題之事、歌仙短冊之事、万葉書之事、往来書之事、商人日記帳表書事、折紙之事ほか38項と消息例文4通。

東江先生書話（とうけいせんしやうわ） 沢田東江（鱗・景瑞・文竜）作（述）。橋圭橘編・序。明和6年（1769）自序。「江戸」万屋太次右衛門板。▽書論や書道全般にわたる随筆。（上巻）蘭亭記伝来の話、十七帖に真贋ある話、独草・連綿草といふ話、草書よめがたきといふ話、能書筆をえらばずといふ話、大字・中字・小字の話、腕法三品ある話、書家に雅俗ある話、和漢碑を建し始りの話、上毛多胡郡古碑の話など20話。（下巻）水神山谷が書をおむ話、宗楚客名筆を集めて屏風に張し話、墨本を作りし始りの話、一字値千金といふ話、一日に三万字を写す話、王羲之洗硯池并二蘭亭古跡の話、代書人并二右筆といふ話、古銭に宸翰ある話、日本の書中国と抗衡する話など22話。附録に書家心得14話。

■第94巻【伝記】（収録9点）

妙祐往生伝（みょうゆうせんじょうでん） 渋谷芳忠（孫左衛門）作。雲介子関通編・序・跋。元禄14年（1701）作。「江戸」竹叢軒（三縁山西溪）蔵板。▽泉州岸和田城主、岡部美濃守家中、渋谷孫左衛門芳忠の母である信女妙祐の伝記。元禄13年9月末、大病に罹ってから、翌年3月に行年55歳で大往生するまでの経緯が主。霊夢を見てからの不思議・奇瑞の体験談を詳述する。

越後孝婦伝（えちごこうぶでん） 林鳳谷（信言・子恭・松風亭・愿）作。相田政雋跋。寛保2年（1762）作。刊行者不明。▽越後国三島郡尼瀬町（現・新潟県出雲崎町）の大工・作大夫の妻百合の行状を記した孝婦伝。百合は32歳で、夫が出稼ぎの留守中に11歳の女兒と5歳の男児、中風を病み身体不如意の79歳の姑を抱えて一家を守っていた。

義士夜討高名咄（ぎしやどくこうなむち） 承天則地（広岳院六世・大清撫国禅師）作。享和3年（1803）、越智直澄（河野直澄）序。「江戸」泉岳寺蔵板。▽吉良邸討ち入り後の赤穂義士の身柄を、泉岳寺の長恩和尚とともに命がけて預かった広岳院の承天則地和尚が、直接、大石内蔵助らに取材し、各自の証言に基づき詳しく書き留めた記録。

「江州日野」孝子善治行状（こうしゆじやうのこう） 門坂善太郎作・序。文化1年（1804）自序。「京都」脇坂仙治郎板。▽近江国蒲生郡日野・鍛冶町の孝子・善治（善次）の行状を記した孝子伝。冒頭で「父母の死後迄も不孝を重」ねた作者自身の体験を交えて父母の高恩を述べる。父は傘職人、母は雇われ仕事や賃仕事、績み紡ぎなどで生計を立てる貧家に生まれた善治は、14歳で父が病死、間もなく母が失明し、奉公先に暇願いをして実家に戻り、正心誠意の孝養を尽くした。「子たる者の規矩」であると結ぶ。

百姓逸八後家はつ孝義状（ひやくしゆいつぱちこうぎじょう） 野田松三郎編・跋。文化4年（1807）刊。「野州足利郡力」野田松三郎板。▽山口鉄五郎支配所、野州足利郡上川崎村（現・栃木県足利市川崎町）の百姓逸八の後家はつ（32歳）の孝婦伝。長男が誕生すると間もなく夫は労症（肺結核）を患い死去、はつは老いた舅姑への孝養や介護に心を尽くした。深夜に盗賊が入って姑が殺された時、はつは盗賊の一人に背後から組み付いて姑を助けたが、受けた疵で左腕の自由がきかなくなった。

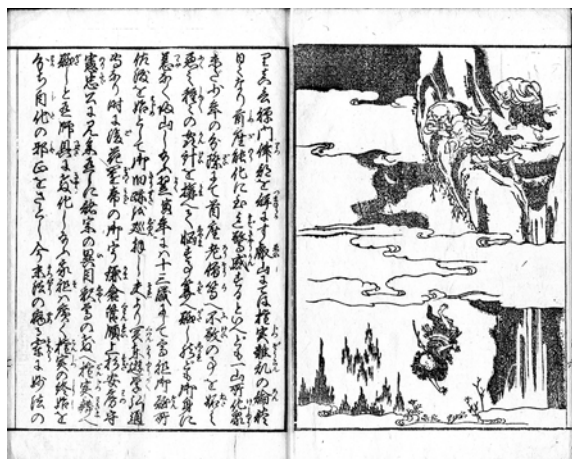
孝子奇特を書出（こうしきとくをかくしだす） 「作者」不明。文政10年（1827）書。▽阿波国麻植郡西麻植村（現・徳島県吉野川市鴨島町）の百姓・与兵衛ならびに嫡子・与左衛門を始め阿波国における享和・文化年間の孝子11人（全て男性）の行状と褒賞を記録した全7丁の小冊子。

「朝師」紀季録（あさしるきせきろく） 一乗舎黙翁（日廻・聖坂黙翁老居士）作・序。文政10年（1827）自序。「江戸」井口氏ほか蔵板。▽室町前期の日蓮宗



(93巻)

* 図版は収録資料の一部です。詳細はホームページの配本案内をご覧ください。



(94巻)

の僧侶、日朝上人（1432～1500）の一代記。日朝の字は鏡澄、号は行学院。伊豆国に生まれ、8歳で出家、28歳で三島の本覚寺を継承、40歳で身延山久遠寺（現在、日蓮宗総本山）法主となる。同寺在職38年の間に、教団発展に対応して堂塔を整え、宗祖日蓮の祖廟を中心とする法則を定めて組織体制を確立、また教義の組織化に努め、天台教学にも造詣が深かった。著作に『法華草案鈔』や『補施集』百余巻など。合計8葉の挿絵。

孝連人物考（こうれんじんぶく）川瀬友山（菅原友山・孝学道人・清水堂主人）作・序。天保8年（1837）刊。『美濃』清水堂蔵板。▽美濃国大野郡寺内村出身で、天保8年春から孝の実践を旨とする孝学道（孝連）を提唱し、天保12年に京都の水火天神（水火天満宮）を拠点に布教活動を展開した作者が、草創期の門人（多くが美濃国在住者）120人の道歌・金言類とともに、その出身地・氏名・孝名（門人としての呼称）を列記した歌集及び門人一覧。川瀬友山の著作は水火天神神職以後のものが多く、本書は孝連草創期の組織や活動に関する記述が豊富で貴重。

和漢二十四孝（わかんじゅうしごう）柳下亭種員（麓園種員）作。江戸後期（嘉永頃）刊。『江戸』森屋治兵衛板。▽嘉永2年（1809）序。刊『和漢二十四孝図会』の改変・改題本。前半部に中国の『二十四孝』にならって選んだ日本の24人の孝子（仁徳天皇・養老孝子・藤原衛・小野篁・大江孝周・小松内大臣重盛・農民甚助・竹内邑今女・北条泰時・楠正行・後三条院ほか）の小伝と挿絵、後半に中国の二十四孝の小伝と挿絵を集める。各丁とも上方三分の一を小伝にあて、下方三分の二を挿絵とする。

第95巻【医学・養生】（収録2点）
こけぬ杖（こけぬづゑ）（正編・後編）（うきふん）山口重匡（山口雅楽）作・序。正編寛政10年（1798）自序・刊。『京都』著者蔵板。後編文政1年（1818）刊。『大阪』河内屋平七板。▽陰陽思想に基づいて養生全般を述べた書。正編上巻は、天地・陰陽のあらましから説き始め、息、命、長寿短命論、心やストレス、房事、隠虚火動の理、服薬心得など。同下巻は、病中・病後心得、熱病・湿病・小児病その他諸病、食事心得、鍼灸、無病の秘訣など。後編は、前編に漏れた養生の真意や、効果が実証済みの養生法を記したもので、特に「灌水・灸治」について詳述。

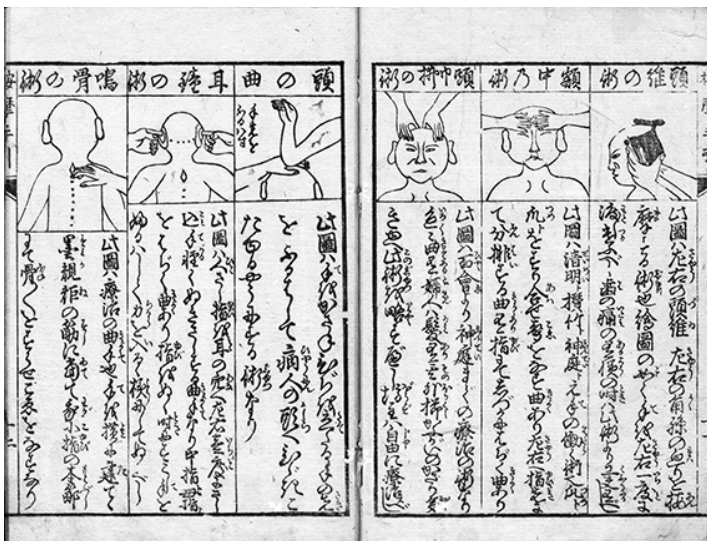
按摩手引（あしあて）藤林良伯作。寛政11年（1799）、橘春暉（南谿・梅華仙史）序。『大阪』加賀屋弥兵衛ほか板。▽按摩の基本を体系的かつ簡潔に記した図解入り入門書。見返しの広告文に「此書は按摩導引の法を師に学びずして、心安く覚へ、人の急病の助けとなし、又は式法を用て常によく其氣血をめぐらす時は、人をして無病長生ならしむる、実に有益の書なり」とある。頭療治稽古、療治人体之備、按摩自慢せぬ心得、補瀉の療治、服診の事、小児按摩、産婦按摩、鍼術稽古など。「按摩稽古」では按摩施術の秘訣52種を図解、ほかにも多くの図解を施す。

第96巻【測量】（収録4点）
規矩分等集（ききふんどうしゅう）万尾時春（六兵衛）作。享保7年（1722）刊。『江戸』小川彦九郎板。▽作者が考案した「四方六面鉤（四方六面様合曲尺）」（水を盛って水準をとることにより水平・直立を正すことのできる真鍮製の測量具）の仕組みやその使い方を始め、種々の測量かねためあわせがね具や測量方法、また、日月運行など天文・暦学の初歩知識を述べた入門書。多くの図解を掲げる。

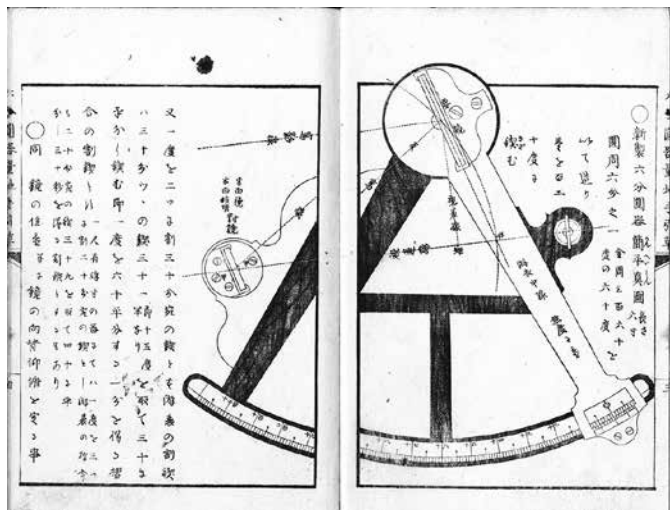
量地図説（りやうちず）甲斐駒藏（広永・子漢・蕃山・吐雲）編。嘉永5年（1852）刊。『江戸』数学道場蔵版。▽初学者用の測量術入門書。算法を知らない者でも、木製の測量器を使い、磁石を用いず、曲尺があれば遠近高低から田畑・屋敷、国郡郷村の量地まで可能と謳う。正方儀、水縄、野帳、間竿、仮標、界針、鉤股弦、見通高目的図、隔川量山高図など合計43項目。

六分円器（りくぶんえんぎ）村田如訥（恒光・栢堂・佐十郎・朽木軒）編。嘉永6年（1853）刊。『江戸』学而堂板。▽「六分円器（六分儀）」の原理・構造・使用法から、それを用いた測量の実際までを述べた測量術入門書。六分円器は、地球上の二点間の角度をはかる携帯用の器械（広辞苑）で、「セキ（ク）スタント」とも言う。「六分円器は、西洋の人創製する所にして、其機智巧思の精、和と唐との能くおよぶ所に非ず。航海必用の器なり。」

量地円起方成後編（りやうちえんきほうせいこうへん）剣持章行（要七・成紀・任数堂・予山）作。安政2年（1855）刊。『江戸』岡田屋嘉七売出。▽嘉永6年（1853）刊の正編の後編。複雑な形状の土地の測量の手順を細かく図解、また野帳（検地などの現場で記した基礎的な測量帳簿）や縮図の書き方も例示するなど、より実践的な内容。



(95巻)



(96巻)

■第97巻【年中行事】（収録5点）

国朝佳節録（こくちょうけつれく） 松下見林（秀明・慶撰・西峯）編。貞享5年（1688）刊。「大阪」森田庄太郎（森田永英）板。▽日本古来の年中行事に関する諸説や故事などを、出典（日本書紀・旧事本紀・博雅・本草綱目・事文類聚・太平御覧・月令広義・居家必用・書言故事・名月記等）を示しながら比較的詳しい漢文注を施し解説。

和漢年中修事秘要（わかんねんしゅうじひやく） 大江文坡（匡弼・臥山人・菊丘・臥仙子）作。天明2年（1782）刊。「京都」吉野屋為八（永昌堂）板。

▽和漢の数多くの文献（引書二五五部）に取材し、日本と中国の年中行事の故事や意義、飲食・薬方の心得を、主に養生の観点から詳述。頭書「修事秘要拾遺補註」に各月の異名や本文の補遺や補注、合計約150項目を載せ、所々に挿絵を掲げる。

本朝歳時考（ほんちょうさいじこう） 松亭金水（中村経年・保定・金水道人・女好庵）編。嘉永4年（1851）刊。「江戸」大和屋喜兵衛板。▽「稚き女童部」をして、その故実を知らしむる捷徑ならん」の趣旨で、貝原好古編『日本歳時記』を参照し、月の異名やその月の節気、年中行事の故事由来や意義、その時期の健康法（薬方・飲食心得等）などを記す。頭書に本文の補足や関連の挿絵を載せる。

四時遊人必得書（しじゆじんひとくしよ） 山田梅東（敬直・其正・左一・松桂・翠雪・無用庵主人）編。文久1年（1861）刊。「京都」越後屋治兵衛ほか板。▽四季風物の故事、交遊に関する事柄を種々の文献から集める上下二巻。上巻は正月54、二月46、以下、合計267項目に補遺17項目、さらに附録で年中行事や十干十二支・閏月・十二時その他の異称を掲げる。下巻は、焼尾宴・探花宴など四季交遊に関する90項目。

大日本万物歳時記（おほにっぽんものとしじき） 前半Ⅱ神仙堂作、後半Ⅱ雷山作、いずれも野崎魯文（仮名垣魯文）校。江戸末期刊。前半Ⅱ「江戸」恋岱堂蔵板。後半Ⅱ「江戸」種玉堂蔵板。▽日本の年中行事の起原、毎月的主要行事の意義や由来等を略述。また、天地開闢のあらまし、軍神の祖、統治者の歴史、五臓六腑・五輪五体、神道や陰陽思想に基づく方角・時日の意義、女性の装身具・化粧の意義などを説明。

■第98巻【神道】（収録6点）

神路の手引（かみちのて） 増穂残口（増穂最伸・十寸穂耶馬台・似切斎）作。享保4年（1719）刊。「大阪」武川善右衛門（富政）ほか板。▽日の短い秋の日に、奴一人に旅道具を持たせ、当て所もなく旅する男が遭遇した、六〇歳代初めの老女との対話を通じて、神道に関する種々の事柄の故事由来や生活心得を綴った初学者用の教訓書。

神路之手向草（かみちのてむすぐさ） 今西洪克作。享保6年（1721）刊。刊行者不明。▽最伸（増穂残口）作『小社探』と牧樵子作『小社探買詞（残口猿轡）』『艶道通鑑』『小社探』などの『残口八部書』の批判の両説を評論した書。著者は世間で非とされる最伸の『小社探』を支持、多くが『買詞』の批判であるが、『小社探』の誤りも適宜指摘する。

神民須知（かみんしゆち） 小佐野某作。天明5年（1785）刊。「京都」河南儀兵衛売出。▽童蒙向けに神道や拝礼の基本を記す。拜神式、祓祝詞、神名略記、服忌令に分け、特に「拜神式」では、祝詞の意味や拝礼の動作・心得を細かく注記、丁寧に解説。

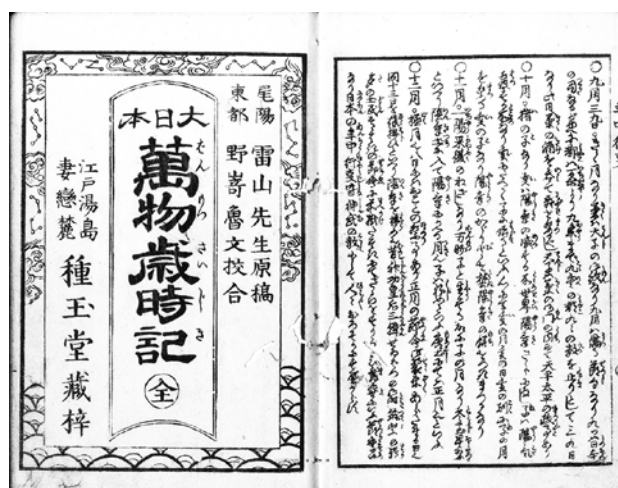
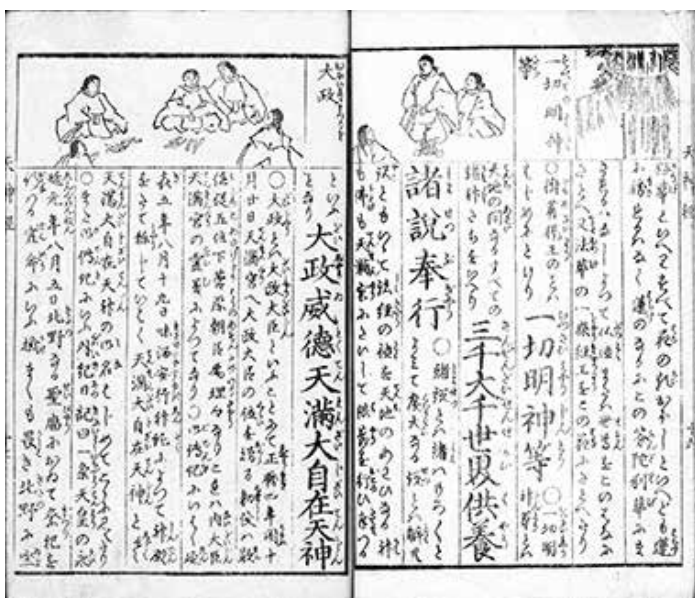
「幸神」阡陌の立石（さいしんせんぱくのかたちいし） 玉田永教（主計）作。佳信画。享和2年（1802）刊。「京都」秀穂舎蔵板。▽京都の家塾・秀穂舎を拠点に諸国に布教するかたわら、平易明快な神道書を数多く著した玉田永教の著作の一つ。猿田彦大神の神徳や祭礼、具体的な拝礼法と供物等の祀り方、その加護の広大なことを説いた教訓書。

天神経絵入講釈（てんしんけいしやう） 笠亭仙果二世（篠田仙果・篠田久次郎・万石亭積丸）作。慶応3年（1867）刊。「江戸」森屋治兵衛（錦森堂）板。▽江戸時代の寺子屋、特に天神講の際に唱えられた偽経である『大威徳天神感応経（天神経）』を子供向けに解説した平易な絵入り注釈書。菅原道真の威徳を尊崇し、その神徳を讃嘆、詳細な割注。

神道道しるべ初篇（かみちだうしるべしつぽん） 野之口（野々口）隆正（大國隆正・今井中・仲衛・如意山人・真瓊園・佐紀乃舎・葵園）作。江戸後期・文久2年（1862）以前刊。「津和野力」佐紀乃屋（著者）蔵板。▽国学者・大國隆正による神道系の通俗教訓書。初編のみ刊行か。口語調の文章で、長短三三九条よりなる。孝、忠、善悪、食衣宅、人界、職分等。

■第99巻【本草・植物】（収録2点）

「草形出生」草花絵全書（くさかたしゅっしん） 伊藤伊兵衛四世（政武・染井伊兵衛）作・序。伊藤伊兵衛三世（三之丞）画。元禄12



年(1699)刊。「江戸」須原茂兵衛板。▽日本の園芸文化の隆盛に寄与した元禄期、江戸染井村の園芸家・伊藤伊兵衛四世(1676～1757)が、父(1739没)の描いた草花123図に、草花の形状・色や異名など解説を施した図鑑。温室の花や切り花ではなく、野外に咲く自然の姿を描いた点に特色があると強調する。

本草図譜(山草部・芳草部) (ほんそうずふ・さんぽう) 岩崎常正(灌園・源蔵・東溪・又玄堂) 作・序。岡田清福(椿斎)画。文政13年(1831)刊。「江戸」山城屋佐兵衛ほか板。▽明の李時珍『本草綱目』(全52巻・付図2巻、約一九〇〇種収載)の貧弱な植物図に刺激され、自ら実見した約二千種の植物等を収録した本邦初の本格的な彩色植物図鑑。見開きで花卉を大きく描くなど大胆で迫力のある絵が多く、絵が主体の画期的な図鑑、全92冊。20余年の歳月をかけて文政11年に5～96巻が完成、同13年に最初の5～10巻が単色の木版刷りで出版された(底本はこの部分。後に改めて手彩色写本が制作された)。11巻以後は出版の目途が立たず、希望者に有償で手彩色の写本を予約頒布された。作者在世中に完成したのは56巻まで。

第100巻【画譜】(収録3点)

絵本集草 (えほんしゅうそう) 長谷川光信(松翠軒・柳翠軒・庄蔵)・岡山繁信ほか画(以上の画工は底本に署名のあるもの)。宝暦頃初刊。明治初年再刊。刊行者不明。▽宝暦頃刊行の絵本一〇点を集成・再刊したもの(木版刷り)。①絵本趣向尽(北尾雪坑斎画。雑俳の絵解き)、②吉日増見鑑(馬淵光信画。年中行事や風物を描いた絵本)、③当世絵本隠笠節分話(北尾雪坑斎画。当世風物語)、④絵本対歌実(北尾雪坑斎画。狂歌絵本)、⑤古今栢毬哥(北尾雪坑斎画。童謡の絵物語)、⑥絵本淀之流(長谷川光信画。京都と大阪の風俗を対照させた狂歌絵本)、⑦絵本旅の旭(長谷川光信画。諸国名物風俗絵本)、⑧扇子勤功誌絵抄(大阪)糸屋市兵衛板。北尾雪坑斎画。新年の年玉、礼儀や祝儀を述べる必需品、土産物やお祝いの進物など、扇の功用を絵解きした絵本)、⑨花兜名香鑑(岡山繁信画。源頼政、木曾義仲など故事や名場面を描いた武者絵本)、⑩福德恵方参(北尾雪坑斎画。節分に厄払いが唱える文句を絵解きした祝儀物の絵本)を収録。

北樹画譜 (きたじゅえ) 葛飾北樹画。嘉永5年(1832)頃刊。刊行者不明。▽葛飾北樹晩年の門人で、江戸後期(弘化～嘉永頃)の浮世絵師である北樹の、刊本ではほぼ唯一の作品。見開きの山水画と半丁に小さな挿絵を数多く描いた人物や魚鳥・草木等の挿絵を集めた画譜で、特に人物画は表情豊かで、『北斎漫画』を想起させる筆づかいや図柄が目立つ。

半山画譜 (はんざんえ) 松川半山(翠栄堂・安信・霞居・直水・義卿)画。明治初年刊。「京都」松柏堂蔵板。「東京」文陽堂書店ほか売出。

▽松川半山の挿絵を集めた淡彩刷りの画譜で、表情豊かな庶民風俗画、優れた情景描写の風景画や和漢の故事に因む挿絵など90葉を掲げて雑俳を添える。雲和亭湖龍編、松川半山画、嘉永4年刊『画口合瓢之夢』三巻三冊の挿絵のほとんどを抽出・改編したもの。



(99巻)

【第61～100卷】

¥28,000.

(2022年5月刊)

これは、使える！

〔63卷＊食養生〕

〔阪〕柳原喜兵衛ほか板。

〔内容〕分類「飲食・医学」。食養生（食療）を説いた医学書。一卷は、水部（「臘雪水」以下三項＊項目数は見出しの数以下同じ）・穀部（「糲」以下三一項）・造釀部（「豆腐」以下三三項）・菜部へ上（「蘿蔔」以下三九項）、二巻は、菜部へ下（「薇」以下六七項）・木部（「茶」以下二五項）・果部（「桃実」以下四三項）、三巻は、榘蔵部（「松茸」以下一四項）・禽部（「鶴」以下四二項）・獸部（「牛・黃牛肉」以下一一項）・虫部（「蝮蛇」以下六項）、四巻は、魚部（「鯉」以下一〇三項）・介部（「花蛤」以下二七項）で、全二三部四三四項の食品について、異名、外見その他の特徴、気味（味覚や毒性の有無）、主治（効能）、禁忌などを詳しく記す。また、四巻末尾に付録として「合食禁（食い合わせ）」「救急捷方（マムシに噛まれた場合や魚の骨が喉につかえた場合など種々の応急処置）」「治諸畜病方（家畜の病気の治療法）」について略述する。

「主要目次」

23

第一巻＝水部〔63-139〕 臘雪水・露水〔63-139〕 浙三泚〔63-140〕 穀部〔63-140〕 糲〔63-140〕 粳〔63-141〕 秈米〔大
唐米〕・沙廬米・米粃〔小糠〕〔63-142〕 早穀・小麥〔63-143〕 麥奴・大麥・青稞〔63-144〕 穞麥〔弘法麥〕・稷〔粳〕
黍〔63-145〕 黍・粱〔猪不食・大粟〕〔63-146〕 粟〔粳粟〕〔63-147〕 秫・蜀黍〔唐黍〕・玉蜀黍〔南蛮黍〕〔63-148〕
蕎麥〔63-149〕 黃大豆・黑豆〔63-150〕 赤小豆・豇豆〔大角豆〕〔63-151〕 綠豆〔文豆〕・綠豆黃卷・豌豆〔63-152〕 黎豆〔
八升豆〕・刀豆・蚕豆〔空豆〕・藊豆〔隱元豆〕〔63-153〕 稽豆〔痰切豆〕〔63-154〕 造釀部〔63-155〕 豆腐・豆腐皮・
雪花菜〔63-155〕 醬・豆油〔醬油〕〔63-156〕 味噌・酒・酒糟・燒酎〔63-157〕 米醋・麴〔粧〕〔63-158〕 鮓〔団子〕

[63-159] 粽 (茅卷)・溫飩 (餛飩)・素麵 [63-160] 黒兒 (蕎麥切)・麵筋・飴・餓 [63-161] 饊子 (干菓子)・筍 (州
 浜) [63-162] 白糖・冰糖・寒具 (油煎) [63-163] 粳 (稷) [63-164] 菜部(上) [63-164] 蘿蔔 (大根) [63-164] 胡蘿蔔・
 蕪菁 [63-166] 松菜・紫菀・四月臺 [63-167] 藏菜・水芹・三葉芹 [63-168] 防葵 (浜防風)・水菜 [63-169] 款冬 (路) [63-170] 彭
 翁菜 (牛蒡)・紫蘇 [63-171] 地膚 (帚木)・菠薐 [63-172] 薺菜 (山薺) [63-173] 蕒荷 (茗荷)・独活芽・蓼実 [63-174] 蕃椒・
 苦菜 [63-175] 菘菜 (唐菖蒲) [63-176] 水高菖・葱 [63-177] 科葱・漢葱・胡葱・茗葱 (行者胡) [63-178] 葦・小蒜
 [63-179] 葫 (大蒜) [63-180] 薤 (辣蕒)・生薑 [63-181] 地笋 (白根)・草石蚕 [63-182] 蒟蒻 (藕)・葛粉 [63-183] 蕨
 [63-184]

第二卷—菜部(下)〔63-189〕、
 薇・青囊〔63-189〕、罌粟嫩苗〔63-191〕、芥・白芥〔63-192〕、皺葉芥・茄子〔63-193〕、錦荔枝

江戸時代を知る
資料の宝庫に
縦横無尽に駆け巡る
最強ツールです！

- 《解題》①第2期(第61～100巻)収録資料157点の書誌情報と内容概説。参考図版も追加など、既収録の解題内容を更新した**決定版解題**。
②資料本文中からキーワードを丹念に抽出した「**主要目次**」。
- 《索引》①の「**主要目次**」(上記②)をもとに「事項・人名・書名」の**詳細索引**を作成。
②「収録文献索引」は第1期(第1～60巻)と合わせた全100巻を対象とし、
(1)五十音順、(2)分野別(『江戸時代女性文庫』を含む)の2種を作成。

「第2期」別巻・索引には
主項目(太見出) 約2,600
小項目(細見出) 約1,100
収録しています。

★原資料にはほぼ目次がありません。このように詳細目次を作成し、全面的にルビを振るなど、内容が把握しやすい「使えるルール」です。

* 同一単語や関連語を含むものを「共通する語」(太見出) でまとめた、検索しやすい索引です。

鬼神(かみ)の感応 98-277
上(かみ)
＞上新田村三右衛門 74-18
＞上つ代の意(にころ) 78-285
＞上の関 81-204
紙(かみ) 65-283, 67-71, 67-370
＞紙冑人(かみのかぶと) 97-26
＞紙雛 98-386
＞紙を漉く法 74-169
＞生紙(きがみ) 69-97
＞地紙 100-146
＞紙帳(しちょう) 71-165
＞紙魚[白魚・蠹魚](しみ) 86-453, 97-154
＞熟紙 69-96
＞漿紙(しょうし) 69-96, 69-97
＞積極紙製法 62-217
＞畳紙(たとうがみ・はながみ) 100-82
＞唐紙[毛辺紙](とうし) 65-271, 65-273, 69-96
＞鼻紙 87-103
神(かみ) 90-26, 98-187, 98-517
＞神谷志摩守久敬(かみやしまのかみひさよし) 94-68, 94-78
＞神在月(かみありづき) 100-122
＞神隠(かみがくし)の人に遣す状 71-80, 71-124
＞神かけて(*儀同三司母もじり) 71-454
＞神風の吹荒(ふきささび) 98-202
＞神々様 98-518
＞神座(かみざ・かみくら) 84-134, 84-153, 84-188
＞神様は(*中納言家持もじり) 71-421
＞『神路の手引草(かみじのてびきぐさ)』 98-175
＞神棚の封 84-108, 84-117
＞神帳 100-122
＞神無月[十月](かみなづき) 90-41
＞神に二種あり 73-388
＞神に向かう 98-278
＞神の教(おしえ) 98-105
＞神の訓(おしえ)は正直 98-227
＞カミ[神]の訓(くん) 98-38
＞神の使者 98-235
＞神の神変不思議 98-249
＞神の友たる人 98-55
＞神の変化 98-248, 98-255

＞神の道 98-32
＞神は隠身(かくりみ) 98-525
＞神は心 94-321
＞神はその清きにまします 98-30
＞神吉日(かみよしにち) 78-191
＞神を祈りて利生(りしょう)を受くる事 78-262
＞神を送る 98-287
＞神を祭る式礼 98-221
＞木の神 98-318
＞神輿(みこし) 100-105
＞神輿雛形(みこしひながた) 76-390
髪(かみ) 61-187
＞髪置(かみおき) 100-38
＞髪結(かみゆい) 75-254
＞白髪(はくはつ) 66-266, 97-91, 97-130
＞＞白髪は貴賤を厭わず 92-351
＞髻粉(かみこ) 89-268
剃刀(かみそり)の磨革(とぎかわ)に附くる薬脂(あぶら)の法 64-95
上野[上毛](かみつけ) 90-91
＞上毛野田道(かみつけののたぎ・たみち) 70-149
＞上毛野八綱田(かみつけののやつなた) 70-118
＞上毛多胡郡(たごこおり)古碑の話 93-283
雷(かみなり) 75-178, 78-443, 79-23, 79-24, 79-309
＞雷の占い 79-311
＞雷の形 79-24
＞雷の撥(ばち) 79-29
＞雷の予知 79-316
＞雷へ暑中見舞状 71-70, 71-116, 71-139
＞深く雷を嫌う者 79-32
神代(かみよ)
＞神代質素の理 76-348
＞神代の遺風 76-353, 76-360
＞神代の遺風は質素 98-126
＞神代の人(のこころ) 98-198
＞がむしやら[我武者羅] 71-135
亀(かめ)
＞亀菊 → 伊賀局(いがのつばね)
＞亀島屋権右衛門(*休所) 91-371
＞亀山院[龜山天皇] 70-119 → 龜山帝
＞亀戸(かめいど) 82-355
＞亀の塔 100-276
＞亀は万年 100-174

王瓜(胡瓜) [63-194] 冬瓜(瓠瓜)・菜瓜(浅瓜) [63-195] 南瓜・番南瓜・接統草(杉菜) [63-196] 地筆(土筆)・萱草
[63-197] 灰藿(青藜)・藜・繁縷 [63-198] 苋・菊・鼠麴草(母子草) [63-199] 薺・艾 [63-200] 百合・山丹・蒲公英
[63-201] 紫花児・鶏冠(鶏頭)苗 [63-202] 苜蓿(馬肥) [63-203] 鹹蓬(松菜)・雞腸菜(嫁菜)・茅針(茅花) [63-204] 瓠蓄
(干瓢)・赤雹子 [63-205] 蘿摩実・烏蘇子・葢菜(十葉) [63-206] 蓴菜 [63-207] 薤菜(水繁縷)・草薺(鬼野老)・薯蕷
[63-208] 仏掌薯 [63-209] 零余子・青芋・紫芋 [63-210] 茄蓮・甘藷・黃独 [63-211] 藕・茨菰(慈姑) [63-212] 烏菰
海苔 [63-213] 紫菜・燕窩菜・仙菜 [63-214] 石花菜・瓊脂(心太) [63-215] 水松(海松)・蠟菜(石蓴)・羊栖菜(鹿尾菜)
[63-216] 虎栖菜・海索麵・鹿角菜 [63-217] 莫仔屈(水雲)・揆辣迷(荒布)・裙帶菜(和布) [63-218] 昆布・海藻 [63-219]
木部 [63-220] 茶 [63-221] 胡椒・山椒 [63-222] 五加葉・枸杞苗 [63-223] 臭梧桐芽・加条葉・紫桐葉・木通芽 [63-223]
楠芽・白木槿花 [63-224] 梔子花・藤芽・山茶科 [63-225] 木天蓼・吻頭(總木) [63-226] 梧桐子・皂莢芽・苦竹笋
[63-227] 淡竹笋・冬笋(孟宗竹)・都夷香(莫大海) [63-228] 竹実・鉄蕉煎・都鈴子(胡鬼の子) [63-229] 果部 [63-230]
桃実・李実 [63-231] 梅実・杏実 [63-232] 梨実 [63-233] 溫梓・櫻桃 [63-234] 楊梅・枇杷 [63-235] 林檎・栗・安石榴

見本
原寸

349

解題

日年越・七種粥・七種の歌[97-173]、宝蔵開[97-175]、獲・小松引・門松注連、爆竹・小豆粥・「枕草子」・粥杖にて女相の図[97-178]、韓信・二十日正月・歳徳神・「簞篋内伝」・正五月[97-181]、釈迦仏の誕生・「仏祖統紀」・涅槃会[97]、稻荷・彼岸・六阿弥陀巡拝・「塩糞鈔」大師・稻荷・「本朝神社考」・春分・木の枝を地中にさす・灸治・男女を会す[97-187]、三月の追加・三月の異名・艾餅・重三・鼠麴草(母子草)[97-188]、桃花酒・「月令広義」・俗節・曲水の宴・雞合[97-189]、墓参・清明・四月の追加・雛祭・「源氏物語」・接穂[97-190]、笋を貯える・四月の部・四月の異名・拾・衣更・灌仏・仏生会・結夏[97-191]、時物・書画を日にさらす・純陽の月・五月の部・芒種・夏至・五月の異名・粽・柏餅[97-192]、五月の追加・粽・五色の糸・葉玉・「風俗通」・菖蒲湯[97-193]、菖蒲を頭にさす・菖蒲太刀・早良親王[97-194]、粽・屈原・草合・竹酔日・竹迷日・夫婦の交わりを禁ず・荻生徂徠・梅雨[97-195]、蛟竜・「千金方」・六月の部・六月の異名[97-196]、氷室・氷餅・嘉祥・銭十六文で物を食う・林羅山・水無月祓・名越の祓[97-197]、六月の追加・虫干・九夏三伏・甜瓜・七月の部[97-198]、日に晒す・七月の異名・白帷子・「五雜俎」・「公事根源」・乞巧奠・素麺[97-199]、盂蘭盆会・目連尊者・先祖を祭る[97-200]、漁獵せず・中元・「日本歳時記」・灯笼[97-201]、七月の追加・冷水[97-202]、六夜待・八月の部・八月の異名・八朔・田の実の祝儀・団子[97-203]、放生会・八幡御託宣・「本朝神社考」・涼風・竹を伐る[97-204]、新井白蛾・八月の追加・九月の部・九月の異名・拾・衣・重陽・栗子飯・菊花酒・茱萸[97-205]、十月の追加・後の月・「源氏物語」・十三夜の月[97-206]、十夜・葉を取る・生薑・十月の部・十月の異名・神無月[97-207]、十夜の法会・開爐日・玄猪・「延喜式」[97-208]、十一月の追加・鞠・祭・下元・時雨・串柿・頭巾・芋を食う・猪肉・十一月の部・十一月の異名[97-209]、稻荷を祭る・冬至・至日・一陽来復[97-210]、医の祖神・房事を慎む・泥亀を食わず・十二月の部・十二月の異名[97-211]、十二月の追加・節分・「奥儀抄」・乙子朔日・川浸・臘八[97-212]、儺(鬼遣らこ)・釈迦涅槃の日・煤払・鰯寡孤独・物を吞まず[97-213]、除夜・晦日・徐夕・追儺

●江戸時代のこと
何か知りたくなったとき
まずこの「別巻2冊」を
手に取ってみてください！

索引より

見本縮小

解題

「書名」 書名は外題による(首題・序題・柱題・尾題も同じ)。
「書型」 半紙本四巻四冊。天地二二八耗。
「作者」 松岡玄達(恕庵・成章・怡顔斎)作。松岡典(定庵・子勲)校。
「年代」 明和五年(二七六八)三月、藤惟寅(浅井図南)序。明和六年一月、中山玄亨(蘭渚)跋。明和六年九月刊。「大
阪」 柳原喜兵衛ほか板。
「内容」 分類「飲食・医学」。食養生(食療)を説いた医学書。一巻は、水部(臘雪水)以下三項*項目数は見出しの数、
以下同じ)・穀部(糲)以下三項・造饌部(豆腐)以下三項・菜部(下)「蘿蔔」以下三項、二巻は、菜部(下)
「薇」以下六七項・木部(茶)以下二五項・果部(桃実)以下四三項、三巻は、桶産部(松茸)以下一四項・禽
部(鶴)以下四二項・獸部(牛・黄牛肉)以下一四項・虫部(蠅蛇)以下六項、四巻は、魚部(鯉)以下一〇三項・禽
部(花蛤)以下二七項で、全一三四四項の食品について、異名、外見その他の特徴、気味(味覚や毒性の有無)、
主治(効能)、禁忌などを詳しく記す。また、四巻末尾に付録として「合食禁(食い合わせ)」「救急提方(マムシに噛まれ
た場合や魚の骨が喉につかえた場合など種々の応急処置)」「治諸畜病方(家畜の病気の治療法)」について略述する。
【主要目次】

23

第一巻 水部[63-139]、臘雪水[63-139]、浙二泔[63-140]、穀部[63-140]、糲[63-140]、稷[63-141]、秬[63-141]、秠[63-141]、秠米(大
唐米)・沙孤米・米粃(小糠)[63-142]、早穀・小麦[63-143]、麦奴・大麦・青稞[63-144]、穞麦(弘法麦)・稷(稷
黍)[63-145]、黍・粱(猪不食・大粟)[63-146]、粟(稷粟)[63-147]、稊・蜀黍(唐黍)・玉蜀黍(南蛮黍)[63-148]、
蕎麦[63-149]、黄大豆・黑豆[63-150]、赤小豆・豇豆(大角豆)[63-151]、绿豆(文豆)・绿豆黄卷・豌豆[63-152]、黎豆
(八升豆)・刀豆・蚕豆(空豆)・藊豆(隱元豆)[63-153]、穉豆(疲切豆)[63-154]、造饌部[63-155]、豆腐・豆腐皮・
雪花菜[63-156]、醬・豆油(醬油)[63-156]、味噌・酒・酒糟・焼酎[63-157]、米醋・麴(粧)[63-158]、饅(団子)

●「江戸時代庶民文庫」100巻には
あらゆる分野のことが詰まっています！

教育・道德・民衆・女性・子ども・老人・生活・
風習・社会・産業・職人・風俗・芸能・医学・科学・
経済・交通・地理・地誌・地域・宗教・絵画・
美術・書道・出版…の歴史、画像・イラスト・
デザインの素材…

「江戸庶民」の生活を知る

『江戸時代庶民文庫』 別巻「解題・索引」【第1期：第1～60巻】

「第1期」別巻・索引には

主項目（太見出）約 1,650

小項目（細見出）約 3,400

収録しています。

[A5判・上製・クロス装・660頁] ISBN 978-4-908926-02-0

¥28,000.

(2016年12月刊)

学術資料出版
大空社出版



たとえば「地震」を索引で引いて…

- 四書 31-75
- ＞ 四書五経 11-245, 50-61, 51-26
 - ＞ 四書の素読をした者は一生乞食には落ちぬ 51-265
- 辞讀 21-292, 32-51
- 詞章の学[習い] 32-71, 45-82 → 記誦の学
- 至親 34-238
- 嗣親(じしん) 32-331
- 地震 56-35, 59-307
- ＞ 地震失 10-133
 - ＞ 地震殿 59-279
 - ＞ 地震の歌 22-230
 - ＞ 地震の揺るを前方に知る 28-205
 - ＞ 地震前の水脈の異変 59-333
 - ＞ 地震除けの呪い 59-335
 - ＞ 地震を案ず 59-350
 - 地震を繰り占う 27-311
 - 地震を知る歌 26-340
 - 地震を揺らす 8-54
- 地神五代 40-152, 40-260, 60-309, 60-312
- 賤ヶ岳合戦 40-90

次々と展開する
江戸庶民の心と智恵!

《解題》で内容を詳しく知って…

見本縮小



第27巻【家政】より

4-162

る所なり

437

272



解題



【書名】大経五悪図会 たいきょうあくぐわい

【著者】大経五悪図会 たいきょうあくぐわい

【刊行】天明5年(1815) 大経五悪図会 たいきょうあくぐわい

【内容】大経五悪図会 たいきょうあくぐわい

【解説】大経五悪図会 たいきょうあくぐわい

…となりのページに
興味をそそる絵が

…さあ、本文(第10巻)へ

「第1期」(第1～60巻 約22,800頁)には
197点の多種多様な資料が収録されています。